

第二次 東京都子供読書活動推進計画（平成21～25年度）

子供読書活動推進モデル校事業

未読の子供たちが進んで本を読むようになるための読書指南の役割に関する研究

子供の読書活動を推進する

読書指南役の働きかけ

◆ 未読者を中心とした読書活動の取組 ◆

小学校・中学校 読書活動推進モデル校（5校）

◆ 生徒の状況に応じた読書活動の取組 ◆

高等学校 読書活動推進モデル校（5校）

◆ 都立図書館の実践と連携 ◆

都立多摩図書館 都立中央図書館

平成23年8月

東京都教育委員会

目 次

はじめに	1
第1 本テキストの狙い	2
第2 児童・生徒が本を読まない理由はなんでしょう。(モデル校の実態から)	
(1) 子供個人に関すること (個人的要因)	
(2) 社会環境に関すること (社会的要因)	
(3) 物的環境に関すること (物的要因)	
第3 校種ごとの読書状況の現状(モデル校の実態から)	3
第4 読書活動推進の実践例 (小・中学校)	
1 学校司書がコーディネーターとなって読書活動を校内に広げた事例	5
<杉並区立東田小学校>	
2 学校組織とボランティアを有効に活用して様々な人が読書指南役を目指した事例	11
<江戸川区立第六葛西小学校>	
3 本を介し、家族や様々な人との関わりで読書意欲を高めた事例	18
<昭島市立共成小学校>	
4 司書教諭と学校司書と連携し、図書館整備と都立図書館との連携を促した事例	25
<武蔵村山市立第五中学校>	
5 司書教諭が読書活動のコーディネーターとなり図書委員会も読書指南役とした事例	32
<町田市立町田第二中学校>	
第5 読書活動推進の実践例 (高等学校)	
パターン1：読書意欲はあるが、受験勉強等で多忙な場合	
1 学校図書館・読書環境の整備に重点をおいた事例	40
<都立広尾高等学校>	
パターン2：部活動が多忙であり、本を手にとらない場合	
2 新聞を中心に読書活動の活性化に取り組んだ事例	47
<都立石神井高等学校>	
3 図書館運営委員会等の学校組織を中心に読書活動を活性化した事例	54
<都立東久留米総合高等学校>	

パターン２：部活動が多忙であり、本を手にとらない場合

パターン３：読書経験があまりなく、本そのものに抵抗がある場合

- ４ 司書教諭と学校司書の連携を円滑にし「本を使う」授業を展開した事例・・・・・・・・・・ 59

＜都立鷺宮高等学校＞

パターン３：読書経験があまりなく、本そのものに抵抗がある場合

- ５ 学校組織を活性化し全教科で読書活動を取り入れた事例・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

＜都立美原高等学校＞

第６ 都立図書館の事業と連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

おわりに・・ 81

本テキスト作成協力者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82

はじめに

子供にとって読書とは「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」（「子どもの読書活動の推進に関する法律」第2条）です。読書により、子供は広い世界を知り、自分自身の考えを確かめたり高めたりする体験をもちます。また読書は、変化の激しい社会に主体的に対応していくために、自ら課題を見出し、考え、判断し、表現することができる資質や能力を育むものでもあります。更に、読書を通して、子供は多くのよい文章に触れることができ、語彙量の増大や文章を書く力などの国語力の向上が期待されます。読書は、子供が自分の将来に夢をもち、自己実現を図っていく上で極めて重要な役割を果たしているといえます。東京都教育委員会では、このような読書の意義を踏まえ、「第二次東京都子供読書活動推進計画」（平成21年3月）を策定し、子供の読書活動を推進しています。

また、平成23年度より小学校から順次実施されている学習指導要領の充実すべき事項の一つに、各教科における言語活動の充実が掲げられています。その一つの手立てとして、下記のように読書活動の推進が挙げられています。「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語活動を整え、児童の言語活動を充実すること。学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。」（総則 第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項）

そこで東京都教育委員会では、平成22年4月、第二次東京都子供読書活動推進計画に基づき、学校の実情や児童・生徒の読書状況等に応じた読書活動の推進に関わるモデル校を設置し、調査研究を行いました。モデル事業の実施と並行して、事業の取組に則して作成したものが本テキストです。本テキストが、東京都の全公立学校にとって、今後の読書活動の更なる活性化の一助になれば幸いです。

平成23年8月

東京都教育委員会

第1 本テキストの狙い

本テキストは、未読の児童を中心とした読書活動（小・中学校対象）、また、生徒の状況に応じた読書指導（高等学校対象）を推進していくに当たり、特に読書意欲の低い児童・生徒に対する働きかけを行う「読書指南役」（司書教諭、学校司書、学校図書館指導員等）の手法を研究した結果、得られた成果を、東京都の全公立学校に広めることを狙いとしています。

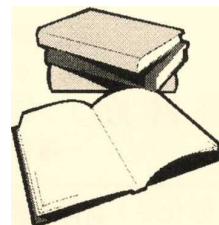
学校や家庭、地域での子供たちの読書活動をめぐる状況は、決して十分整っているわけではありません。本が自分の周りにない、読みたい本があるのに受験勉強や部活で時間がない、本以外の興味あるものがたくさんある、など様々な状況があります。しかし、それぞれの子供の発達に応じて、読書指南役としての大人が様々な手立てを講じ、子供をめぐる環境を整えることで、子供は本を読むようになっていきます。

第二次子供読書活動推進計画に基づく子供読書活動推進モデル校事業では、モデル校がこのような未読者を中心とした児童・生徒一人一人に、「読書指南役」の大人が様々な手法を駆使して、その効果を確かめる研究を行いました。各校の実践から得られた成果や課題をもとに、今後の活発な読書活動へ貢献できればと思います。各学校の読書活動に関する状況は様々です。ぜひ、このテキストを参考にして、各学校に応じた「読書指南役」の在り方や役割、読書活動の取組を学校全体で話し合い、推進していただきたいと思います。

第2 児童・生徒が本を読まない理由は何でしょう。（モデル校の実態から）

児童・生徒が本を読まない理由は一人一人違います。ここでは以下の3つに分けて考えました。

- (1) 子供個人に関すること（個人的要因）
- (2) 社会環境に関すること（社会的要因）
- (3) 物的環境に関すること（物的要因）



(1) 子供個人に関すること（個人的要因）

小学生は概して、本を読む機会に恵まれているようです。本を読むことが好きだと感じている児童も多くいます。中学生になると、「字を読むのが面倒だから」というように、漢字が読めなかったり、言葉の意味が分からなかったりすることが原因で、読書を避けたりする傾向があるようです。高校生では、「本の世界の楽しさに出会っていない」等、これまでの読書経験の不足が読まない理由に深く関わっています。

(2) 社会環境に関すること（社会的要因）

小学生は、「幼いころから、家庭で読書をする習慣がないから」「家庭で読書をする時間や場所がないから」等、家庭における読書に課題があるようです。中学生、高校生になると、「塾や習い事、部活や行事に多くの時間を取られるから」というように、小学生に比べて、学校及び家庭での生活が多忙化していることが原因の一つとして挙げられています。また、「ゲームやテレビ、漫画の方が楽しいから」「インターネット、携帯電話の方が便利だから」

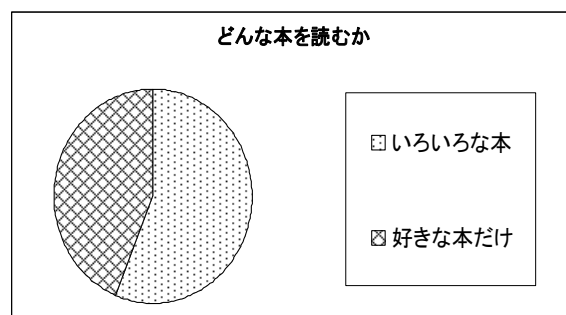
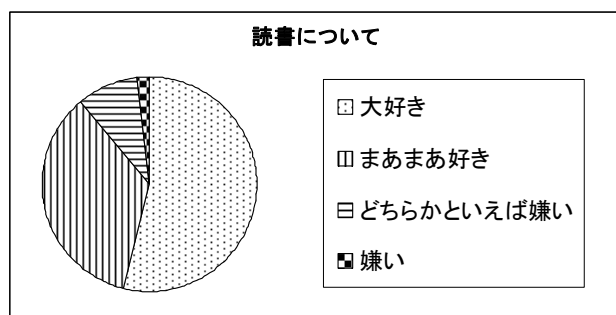
等、活字に触れる機会が少なくなっていたり、スピーディーで刺激的な環境が溢れていたり、
 というような現代社会を反映した要因も大きいようです。

(3) 物的環境に関すること（物的要因）

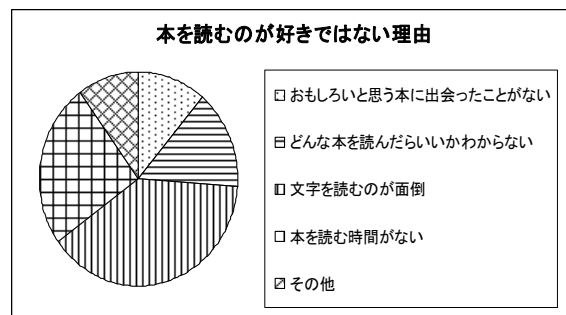
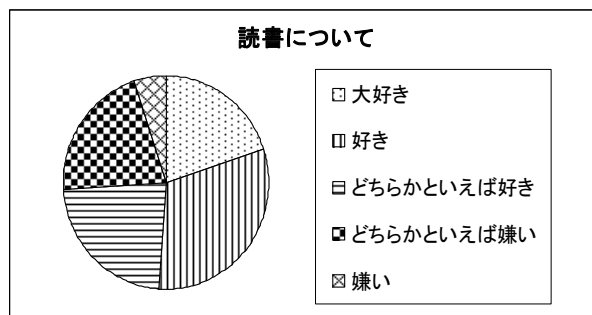
小学生は、「家庭に読みたい本がない」「近くに図書館がないから」というように、児童にとって読みたい本が身近にないことが挙げられています。中学生では、「放課後の学校図書館開放が毎日実施されてないから」「学校図書館に常駐の大人がいないから」等、生徒の図書館利用を支援する体制が、学校図書館にあまり整っていないことを理由にしています。高校生では、「学校図書館が利用しづらい場所にある」等、生徒の動線上に位置していないという学校図書館の立地に関わる課題も抱えています。

第3 校種ごとの読書状況の現状（モデル校のデータより）

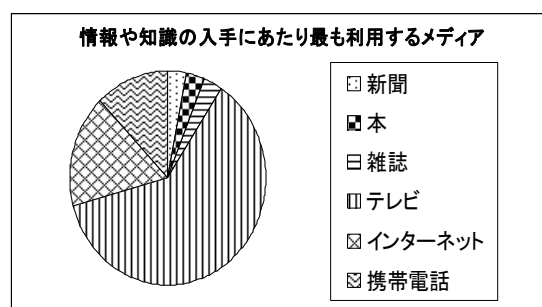
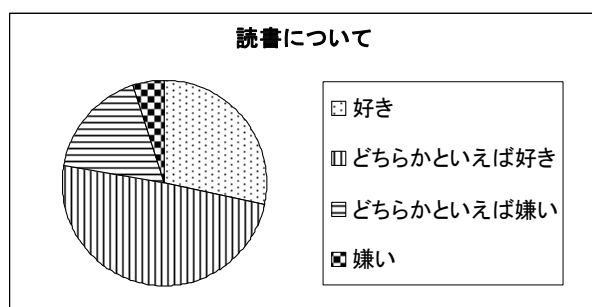
◆◆ 小学校 ◆◆



◆◆ 中学校 ◆◆



◆◆ 高等学校 ◆◆



読書活動推進の実践例

小・中学校編

未読者を中心とした取組

第4 読書活動推進の実践例（小・中学校）

1 学校司書がコーディネーターとなって読書活動を校内に広げた事例

＜杉並区立東田小学校＞

読書指南役：学校司書

1 児童が本を読まない理由

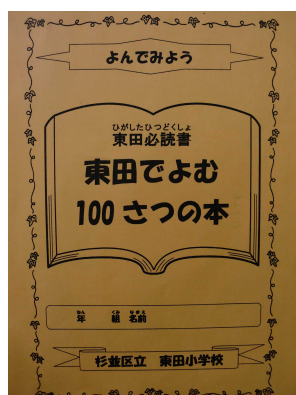
本校は、平成17年度より「東田 未来へのアプローチ ～体力の向上をめざして～」と題して児童の体力向上を中心に教育課題研究指定校として取組んできた。授業研究をはじめ、朝の運動（大縄とび・持久走）や休み時間の外遊び励行等を通して、体力向上の成果を多く残すことができた。しかし、様々な取組を通して体力が向上した反面、教室で静かに読書をする児童はほとんど見られず、図書室を利用した読書数についても少ない傾向が見られた。

そこで、平成20年度より「学力（まなびりょく）と体力（からだりょく）の向上」を研究テーマとし、図書室の学習センター化を図ってきた。平成21年度には学校司書が配置され、多くの実践を積み重ねながら読書が好きな児童の育成を図っているところである。

2 具体的な実践事例

(1) 東田小必読書の推進

在学中の6年間で100冊の本を読むことを目標として推進している。古典や名作を中心として、読んでおいた方がよい本や長く読み継がれてきた本100冊を選んでいる。各学年の必読書は1・2年生各25冊、3・4年生各15冊、5・6年生各10冊としている。



題名	著者	出版社	学年
1. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
2. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
3. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
4. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
5. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
6. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
7. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
8. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
9. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
10. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
11. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
12. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
13. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
14. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
15. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
16. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
17. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
18. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
19. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
20. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
21. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
22. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
23. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
24. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
25. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1

題名	著者	出版社	学年
1. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
2. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
3. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
4. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
5. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
6. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
7. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
8. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
9. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
10. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
11. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
12. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
13. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
14. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
15. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
16. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
17. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
18. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
19. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1
20. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	2
21. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	3
22. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	4
23. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	5
24. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	6
25. 大冒険	ロバート・ロビンソン	小学館	1

ア リストと読書カードの利用

必読書を読ませるにあたり、リストを作成して読んだ本についてはチェックできるよ

うにしている。リストは個人で保管し、読んだらすぐにチェックすることとしている。
また、家庭にも配布し家族で取組めるような環境づくりも行っている。

イ 図書の時間の活用

図書の時間にはブックトークや読み聞かせで必読書の紹介を行っている。特に国語の授業と関係させて紹介できる本については、より広がりを持てるようタイミングを計って紹介している。

【例】2年：「お話大すき」

→2年必読書「王さまと九にんのきょうだい」

4年：「一つの花」

→4年必読書「かわいそうなぞう」

また、必読書は学年ごとにまとめて図書室のコーナーに置き、いつでもすぐに手に取れるよう工夫している。



ウ 表彰

各学年の必読書を全て完読した児童に対して、学級で発表するとともに必読書カードに完読シールを貼って意欲を一層高めている。また、必読書100冊を全て読み終えた児童には、校長先生より「完読証」をもらうことで、今後の読書の励みとさせる。



(2) 広報活動

ア 展示や掲示の工夫

図書室内に紹介コーナーを設け、テーマごとに展示している。四季おりおりの行事や学校行事、社会で話題の本などを季節感を出しながら和める空間として工夫している。

展示については、紹介したカードなどと共に実際にその本を展示し、紹介した本をすぐに手に取れるよう工夫している。



イ 図書だよりの発行

月刊で図書だよりを発行し児童全員に配布している。新しく購入した本の情報を伝えたり必読書以外の名作を紹介したりすることで、図書室への興味関心を高めている。図書だよりを心待ちにしている児童や図書だよりを手に問合せくる児童も見られるようになってきている。

図書だよりで紹介した本については、必ずコーナーに展示し、すぐに手にできるようにしている。



(3) 図書委員会との連携

図書委員会は常時活動として年間を通して12回行っている。その活動の中で読書活動旺盛にするイベントも企画運営している。

委員会の活動によって、読書にあまり関心がない児童を呼び込む宣伝効果を上げている。

◆◆ 委員会の取組例 ◆◆

- ・ 図書委員による大型絵本の読み聞かせ
- ・ 図書クイズ大会
図書室に来なければ解けない問題を作成し、上位正解者には特別貸し出し券を進呈する。
- ・ おすすめダービー
お薦めの本を3冊選び、本の帯を作成して宣伝する。
- ・ 図書委員会新聞の発行
学校司書が発行する「図書だより」とは別に委員会児童が作成し発行する。
- ・ スタンプラリー
開催期間中に5冊借りると1冊好きな本を借りることができる。
- ・ 特別貸し出しの宣伝
夏休みや冬休みの特別貸出期間については、ポスター掲示や校内放送等で宣伝活動を行う。



(4) 図書の時間の活用

ア 国語授業との連携

図書の時間は読書活動だけでなく、より幅広くなるよう学習単元に合わせた内容で展開させている。担任と学校司書が連携することで図書室の関連本だけでなく、地域の図書館からも借りることが可能となり、学習の幅が大いに広げることができる。

【例】4年：国語「一つの花」

- ①戦争に関する本を用意（図書室41冊 区立図書館30冊）する
- ②学校司書による戦争に関する文学作品のブックトークや読み聞かせ
- ③読書会開催 戦争文学を一人一冊選び、感想を発表しあう

2年：国語「スーホの白い馬」

- ①モンゴルの風景を写真等で見せてイメージさせる
- ②モンゴルに伝わる昔話をブックトークで紹介する
- ③馬頭琴の実際の音を聞かせながら読み聞かせ



イ 調べ学習室としての図書室

図書室は調べ学習において学年を問わず幅広く利用されている。担任からの要請で学校司書が必要な本を購入したり地域の図書館から借入したりして、児童が本を探す手伝いをするなど支援している。調べ学習で図書室を利用しやすいという感想も多くある。

【例】6年：社会「奈良・平安時代に活躍した人々を調べよう」

6年：家庭「郷土料理を調べよう」

5年：総合「米について調べよう」

4年：図工「版画の図案を考えよう」

3年：総合「自分たちの住んでいる杉並区」

2年：国語「むかし話の中の言葉遣い（方言）」

1年：図工「ゾウのおやこのものがたり」



ウ オリエンテーションの実施

年度当初、学校司書によるオリエンテーションを行い、図書室の使い方の指導を行っている。図書室の使い方や図書の分類等を理解することで、将来にわたって図書館を利用できる習慣付けとなっていくことを意図して指導を行っている。



エ 学校司書による支援

挿絵がなく字が細かいものや装丁が地味なものは先入観から児童が手にしない本も多くある。地味だけでも良書である本を読んでもらうために、学校司書がブックトークで紹介することでほとんど貸出しの無かった本が多く読まれるようになってきた。

そのことで、見た目には目立たなくても楽しく読める本が多くあることを児童が気付き、読書量が増えてきている。人気が集中する本については予約を受け付け、順番が回ってくれば必ず読めるシステムにしていることで不満が出ないようにしている。

◆◆ 担任(T1)と学校司書(T2)の授業実践例 ◆◆

時間	児童の活動	支援・留意点
5分	T1 授業開始の挨拶 T2 以前借りた本を返却する	・ 忘れた児童には翌日に持参するよう指導する
10分	T2 ブックトーク T2 読み聞かせ	・ 学習内容に沿った選書を心がける
10分	T1 読みたい本を借りる T2 選書のアドバイス	・ マンガやクイズは休み時間に読むよう指導する
10分	静読	・ 一人一冊 ・ おしゃべりをしないよう指導する ・ T1 T2 も一緒に読書する
10分	T2 貸し出し T1 授業終了の挨拶	・ いすや本を元へ戻す

(5) 図書ボランティアとの連携

図書室の壁面掲示や朝の読み聞かせなどは図書ボランティアにもお願いしている。各学級での読み聞かせは月1度、発達段階に応じた内容の本を東田必読書と関係させて読み聞かせている。また、月一回プロの声優による全校読み聞かせを行い、児童の情操を高めている。



3 成果と課題

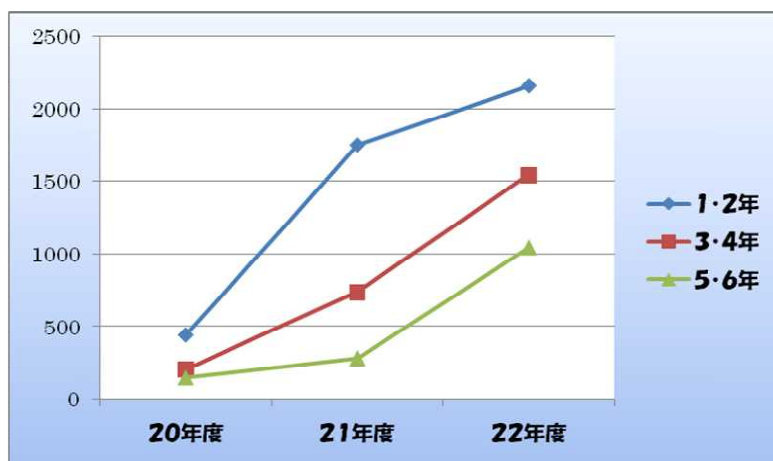
(1) 成果

杉並区では平成21年度から学校司書の配置が行われ、本校は区内で一番に配置された。その後の学校司書の役割については上記の通りである。また、読書センターとしての機能だけではなく、各教科における調べ学習等についても積極的な活用が見られる等、学校図書館を学習センターとして活用することにおいても学校司書が大きな役割を担いその中心として機能している。このような学校司書の取り組みにより教員の意識も向上した。その結果、児童の興味関心が図書室に向き、年間貸出冊数が大幅に増加し、読書活動全般において大きな成果を上げた。(下のグラフ参照)。

(2) 課題

教員の協力や理解は厚いものの、取組のほとんどについては学校司書が中心である。学校司書の配置という人的な環境整備がなければ今までの取組はこれほどの成果は上がっていなかったと考える。現在、一人あたりの年間貸し出し数は17冊であるが、今後も学校司書の効果的な活用を通して、月2冊以上の貸出しを目指し、年間30冊の貸し出しを目標にして取り組んでいく。

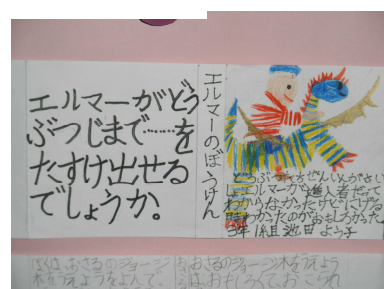
◆ 年間貸出冊数 ◆



4 実践のための効果的なポイント

◆ 学校司書の活用

- ・学校司書を中心とした図書室の環境整備
- ・学校司書による内外の連絡調整



◆◆ 学校図書館運営年間計画 ◆◆

	企画・行事	図書館業務	委員会活動	その他
4月	オリエンテーション 学級文庫配本 貸出開始	進級処理 年間計画作成 図書カード作成	第1回図書委員会(前) 係・分担決め 活動開始	学級役員による 学級文庫選定 読み聞かせ打合せ
5月	購入図書選定	図書館だより発行 統計調査 リファレンス	第2回図書委員会(前) 年間計画予定作成	全校読み聞かせ
6月	委員会発表 お話し会	図書購入	第3回図書委員会(前) 集会・お話の会実施	読み聞かせ
7月	特別貸出 (夏季) 学級文庫回収	未返却図書督促	第4回図書委員会(前) 特別貸出強化活動	読み聞かせ
8月			図書購入 蔵書点検 書架整備	
9月	学級文庫配本		第5回図書委員会(前) 図書新聞発行	学級文庫選定 読み聞かせ
10月	秋の読書週間	読書週間の計画準備	第6回図書委員会(前) 第1回図書委員会(後)	全校読み聞かせ 読み聞かせ
11月		図書購入 フェスタ用展示	第2回図書委員会(後)	読み聞かせ
12月	特別貸出 (冬季) 学級文庫回収	未返却図書督促	第3回図書委員会(後)	読み聞かせ
1月	学級文庫配本	読書週間の計画準備	第4回図書委員会(後)	学級文庫選定 読み聞かせ
2月	読書週間	読書週間の実施	第5回図書委員会(後) 第6回図書委員会(後)	読み聞かせ
3月	学級文庫回収	未返却図書督促		全校読み聞かせ 読み聞かせ

2 学校組織とボランティアを有効に活用して様々な人が読書 指南役を目指した事例

＜江戸川区立第六葛西小学校＞

読書指南役：司書教諭・全教職員・読み聞かせボランティア・ 図書整備ボランティア『ぶっくまま』

1 児童が本を読まない理由

本校は児童数 700 人、19 学級の学校である。図書室には約 1 万冊の本があり、調べ学習に必要な本については最新版のものが多く充実している。学校司書の配置はなくデータ化もされていないが、保護者のボランティア活動が大変盛んで、読み聞かせボランティアと図書整備ボランティア「ぶっくまま」の 2 つのボランティアが本校の読書活動を支えている。学区域にも西葛西図書館があり、地域的にも恵まれた環境にあるといえる。

22 年度当初にとったアンケートで「読書が嫌い」「あまり好きではない」と答えた児童は 6 % であった。その理由を尋ねると以下の通りであった。（複数回答）

(1) 個人に関すること

ア 体を動かすことが好き	47 %
イ テレビやゲームのほうが好き	43 %
ウ 字を読むのが面倒	20 %

(2) 社会環境に関すること

ア 塾や習い事が忙しい	17 %
イ 家庭で読書をする習慣がない	17 %
ウ 家庭で読書をする場所や時間がない	10 %

(3) 物的環境に関すること

ア 読みたい本がない	23 %
イ 家庭に本がない	3 %
ウ 近くに図書館がない	5 %

これらのデータから、課題として考えられることは

- (1) 児童によって読書量の個人差が大きい。
- (2) 読書を好まない児童は、読書の楽しさに気づいていない。
- (3) 文字や漢字に親しんでいないと読書に結びつきにくい。
- (4) 児童にとって読みたい本が身近にない。

ということである。

アンケートから出てきた4つの課題を解決するために、次の計画を立てた。

(1) 読書量の個人差を少なくするための手立て

放課後、塾や習い事で忙しい児童や、家庭ではなかなか読書ができない児童がいるので、学校生活の中で読書をする時間を確保していくことが読書量の差をなくすことに繋がる、と考えた。平成21年度までは、読書月間中のみ全校朝読書を実施していたが、平成22年度は週2回全校朝読書を取り入れるようにし、全員が読書をする時間を確保していくことにした。

(2) 読書の楽しさに気づいていない児童に対する働きかけ

読書よりスポーツやテレビ・ゲームなどを好む児童は、まだ読書の楽しさに気が付かないでいるといえる。読書に関心を向けさせるために、面白そうな本の紹介をさまざまな形で頻繁に行うことにした。

また、読書をするとしおりがもらえたり、読んだ本の記録がファイルに蓄積されたりするよう、読書カードも今年度から改善することにした。

(3) 基礎的な学力をつける取組

本を読むのが面倒くさいという児童は、漢字が読めなかったり、意味がよくわからなかったりすることが多いのではないかと考えた。そこで、基礎的な言語力をつけることが本好きの児童を育てる近道であると考え、辞書引き学習を取り入れることにした。

また、調べ学習に本は欠かせないものであるが、これまではその活用の仕方を系統的に教えてはいなかった。そこで各学年で取組む調べ学習の時間に、その手順を教えることにした。

(4) 児童にとって魅力的な本の選書

「読みたい本が図書室にない」という意見は高学年に多く見られた。本校は平成20年度、平成21年度と調べ学習用の0～800番の本を重点的に揃えてきたが、平成22年度は文学に重点を置き、児童が読みたいと思う本を購入することにした。

(5) 読書活動応援団ボランティアの活用

本校には、図書整備ボランティアの他にも、大勢の読み聞かせボランティアがいる。様々な取組の実践を行っていく上で、教員だけでは手が足りないところは、ボランティアの協力を得ていくことにした。

2. 具体的な実践事例

(1) 読書量の個人差を少なくするための手立てとして

ア 朝読書

年間を通じて毎週火曜日と金曜日、朝読書を全校で行った。

イ 隙間読書の励行

テストが終わった後や給食準備中などのちょっとした時間に読書することを励行した。

ウ ブックバック

常に身近に本を持たせるために、ブックバックを用意させ、その中に常時自分の本や図書室から借りた本を入れ、いつでも読書ができるようにした。

エ 親子読書月間

9月から10月の1か月を読書月間とし、家庭で保護者も一緒に読書をする期間を設けた。月間中は教師も児童と一緒に朝読書をしたり、校長先生による全校児童対象の読み聞かせ集会を開いたりした。

(2) 読書の楽しさに気づいていない児童に対する働きかけ

ア 読書ファイル

従来は、市販の貸し出しカードを利用していたが、カードが小さいため紛失しやすくファイリングしにくかったので、学年別カラーのファイルを1人1冊ずつ購入し、10冊書名がかかるB5の紙に記録することにした。在学中読んだ本は、そのファイルに継続的に記録する。書名だけでなく5つの星に色を塗り、おすすめ度も記録できるようにした。10冊読むと図書委員会作成のしおりがもらえるというご褒美もある。クリアファイルも1枚入れ、おすすめ本のリストなどもファイルできるようにした。図書室の本は、別に学級用のファイルを作り、貸出し状況が分かるようにした。

イ 本の木

読書月間中に読んだ図書室にある本の中で、児童が気に入った本の書名・作者・自分の氏名・紹介文を木の葉の形のカードに書き、木の枝の絵に貼って友達に紹介した。カードは図書整備ボランティアの作成である。

更に、その本の書名と分類と児童名だけを書いたプリントを配布し、読書ファイルにとじさせ、友達が紹介した本を図書室で探せるようにした。

ウ 教職員のおすすめ本コーナー

教職員が児童におすすめする本を1冊選び、ポップを書いて展示した。展示は図書整備ボランティアによるものである。

エ おすすめ本リストの作成

教職員のおすすめ本リスト高学年用・低学年用を作成した。児童が図書室で探せるよう、図書室の本に限定した。読書ファイルにとじさせいつでも活用できるようにした。

オ 図書整備ボランティアによる保護者のおすすめ本リストの作成

保護者全体に、児童が読んでいた本の中でよかった本や、自分が子どもの頃に読んで心に残っている本を書いてもらい、リストにして配った。これもファイルして活用できるようにした。

カ 「ほん・本・ごほん」の配布

都立多摩図書館のご協力により、全児童に「ほん・本・ごほん1」「ほん・本・ごほん2」を配布した。読書ファイルにとじさせ、読む本を選ぶとき、いつでも見られるようにした。

キ おすすめブックレター

図書室にポストを設置し、クラスや学年を超えて友達におすすめ本を紹介する手紙を書く取組を始めた。図書委員会が配布している。

(3) 基礎的な学力をつける取組

ア 辞書引き学習

ブックバックの中に国語辞書も入れさせ、読書中や授業中に読めない字や書けない字、分からない言葉があったら、辞書で調べることを励行した。

イ 調べ学習の進め方

校内研究のテーマを「心を豊かにし、学ぶ力を伸ばす読書活動」と設定し、読む読書と調べる読書のどちらかの研究授業を各学年1回行った。特に調べ学習は大テーマ・小テーマの設定の仕方、参考文献の探し方、参考文献の要約の仕方、レポートの書き方（大テーマ・テーマ設定の理由・小テーマとその内容・考察・まとめ・参考文献）など、手順を追って指導した。

(4) 児童にとって魅力的な本の選書

ア 児童のリクエスト本の購入

本が好きな高学年の中には大人向けの文学を読んでいる児童もあり、「図書室の本は児童向けのものが多く、読みたい本がない。」という声も聞かれた。そこで、今年度は児童のリクエストやアンケートの結果を参考にして、高学年向けの文学も多数購入した。

イ ヤングアダルトコーナーの設置

また、今年度からヤングアダルトコーナーを設け、高学年が読みたい本を探しやすいようにした。

ウ 「ほん・本・ごほん1・2」掲載本の購入

児童に配布した「ほん・本・ごほん1・2」を見て、読んでみたいと思った本が図書室に必ずあるようにするため、掲載されている本を全て購入した。

エ 人気本の購入

赤木かんこ氏の講演会に参加し、児童に人気のある本のリストを参考にして購入した。

(5) 読書活動応援団ボランティアの活用

読書活動応援団は、「読み聞かせボランティア」と「図書館整備ボランティア」の2種類

がある。「図書館整備ボランティア」には「ぶっくまま」という名前が付いている。この二つの応援団は、年間を通じて活動をしており、車の両輪のように児童の読書活動を支えている。

ア 読み聞かせボランティア

読み聞かせは、7～8年前、一部の学年の保護者から始まり、現在では全学年全クラスに広がっている。学年によって回数は違うが、毎週若しくは隔週金曜日の朝自習の時間を読み聞かせの日とし、ボランティアとして登録している保護者が持ち回りで行っている。毎年5月に発足し、本が大好きで児童に是非本を読んであげたいという熱意に溢れる保護者が毎年約100名登録している。各学年のリーダーを中心に、実施する日や当番を決め、計画的に行っている。

読み聞かせの本は重複しないよう、各クラスの読み聞かせノートに記録している。ノートには題名の他、児童の反応なども書かれており、選書の参考になっている。時間が10分間と限られているので、全学年とも絵本が多いが、高学年になると長編の一部を読んで紹介し、ブックトークをする場合もある。また、クリスマスやハロウィンなどの特別な時には、パネルシアターをする学年もある。

児童は、高学年になっても今日はどんな本を読んでもくれるのか楽しみにしている。児童にとって、温かな声で本を読んでもらう読み聞かせは、自分でする読書とはまたひと味違った本との触れ合いになっている。

イ 図書整備ボランティア

図書館整備ボランティア「ぶっくまま」は、毎週月曜と木曜を活動日として、10時から約2時間活動をしている。主に図書の整理・修理・ぶっくらんどの壁面装飾・蔵書の調査などを行っている。6年前「ぶっくまま」が発足する以前は、雑然と古い本が並べられているだけの状態で、児童もあまり立ち寄らない図書室だったが、明るく使いやすい図書室へと、劇的に変わった。

更に、本は新しく美しいものでなければ児童は手にとろうとはしない。特に調べ学習用の図書は、データが古くては活用できない。「ぶっくまま」の協力を得て、調べ学習に必要な最新の図書を手作業でリストアップし区に申請したことにより、3年連続特別予算を獲得することができ、新しい本を大量に増やすことができた。

また本を借りに来るだけでなく、「ぶっくまま」が作るかわいい季節ごとの壁面装飾や端午の節句の背比べ、七夕の笹飾りなどを楽しみに見に来る児童もたくさん増えた。活動中に、本を探しに来た子どもに対してアドバイスを与えるなど指南役としても本校に欠かせない存在である。

3 成果と課題

5月と2月に行ったアンケートから、「読書が好きではない」「嫌い」と答えた児童は、5月当初は6%であったが、2月には4%に減っていた。「大好き」「好き」と答えた児童は67%から72%に増えている。また、「読む本はどこで手に入れるか」の問いに対して「図書室」と

答えた児童は18%から30%に増えている。本校が今年度行った取組は、すぐに効果が表れるものではないと思うが、この結果を見ると一定の成果はあったとすることができる。

読書があまり好きではない児童を更に減らすためには、全体的な取組のほかに、担任がおすすめブックレターを本嫌いの児童に出すなど、個に働きかける取組が必要である。

また、図書室の利用をもっと増やすために、全児童が必ず1冊は常に図書室の本を借りるように呼びかける必要性を感じた。図書の時間に、本嫌いの児童に担任が直接「この本、面白いから読んでみたら。」と声を掛けるなど、継続的に働きかけることが大事である。

4 実践から見えてくる効果的なポイント

(1) 物的環境面

読書好きの児童を育てるためには、図書室が心地よく、児童の読みたい本が揃っていることがまず第一である。図書室を心地よい場所にするための季節ごとの掲示物や本の整理、修理などは、「ぶっくまま」が主に行っている。

文学の選書は、講演会や書評、児童や教員・「ぶっくまま」からのリクエストなどから情報を集め行った。0から800番台については、教員が担任している学年の調べ学習のテーマを挙げ、そのテーマの資料となる新刊本をカタログから探し出し購入した。調べ学習で活用するためには、資料が新しい必要があるので新刊本カタログのチェックは欠かせない。

(2) 人的環境面

学校図書館を活性化させるためには、専任の学校司書がいることが望ましいが、その配置がない学校では、担任を持ちながらの司書教諭がその役割を果たさざるを得ない。22年度、本校の司書教諭が行ったことは、新しい取組の計画・提案、研修会に参加したり本を調べたりすることによる情報収集、集めた情報を職員に周知する情報の共有化、購入する本の選書と廃棄本の選択「ぶっくまま」との連携などが主である。しかしながら司書教諭一人でこれだけのことを全てを実行していくことは不可能である。

本校では校内研究のテーマを22年度より読書活動に変え、全ての教員が関わる体制を作った。研究推進委員は各学年1名、専科2名からなり、「心を豊かにし、学ぶ力を伸ばす読書活動」をテーマとして年間6回の研究授業を行うこととした。

また、図書整備委員会という特別委員会をつくり、図書室に関わる細かな仕事を分担した。更に、司書教諭を含める4人からなる学校図書館部も、司書教諭の相談役として支えとなった。

図書整備ボランティア「ぶっくまま」と読み聞かせボランティアの存在も大きい。「ぶっくまま」は、本校の読書活動を縁の下から支えてくれる存在である。また、本校の児童は入学したときから読み聞かせボランティアによる読み聞かせに親しんでおり、読書が好きになる下地が自然に出来ているといえる。

図書室の書架の大移動や配架の大幅変更も、1,000冊以上の新着本の配架も、教職員全員と図書整備ボランティアの協力があって初めて実現できたことである。

これらのことを考えると、リーダーとしての司書教諭の仕事は大事であるが、司書教諭だけが指南役では、読書が好きな児童は増えてはいかない。児童と直接ふれ合っている教師やボランティア全員が指南役になることが、一番望ましいということがいえる。

◆◆ 年間指導計画 ◆◆

4 月	○ぶっくらんど利用の手引き配布。各クラスでオリエンテーション ○週 2 回の朝読書・新しい貸し出しカード読書ファイル・ブックバック・辞書引き学習 すきま読書の実施
5 月	○都立多摩図書館 浅沼さゆ子氏・増田加奈子氏による講演会 ○第 1 回実態調査実施 ○各学年読み聞かせ開始
6 月	○日本女子大学講師 丸山光枝氏講演会「調べ学習の進め方」 ○6 学年研究授業「好きな歴史上の人物レポートを書こう」
7 月	○六小おすすめ本リストの作成・配布
9 月	○親子読書月間の実施・本の木作成・教職員のおすすめ本コーナー設置 「ぶっくまま」による保護者のおすすめ本リストの作成配布・校長先生の全校読み聞 かせ ○図書委員会による読み聞かせ集会 ○1 学年研究授業「本の世界を楽しもう」
10 月	○全校児童に「ほん・本・ごほん 1・2」配布 ○児童にリクエスト実施・図書の購入 ○2 学年研究授業「おもちゃを作ろう」
11 月	○書架の配置替え・新着本配架・ヤングアダルトコーナー新設 ○4 学年研究授業「本の世界を広げよう」
12 月	○5 学年研究授業「環境について考えよう」 ○おすすめブックレター実施
2 月	○3 学年研究授業「〇〇博士になろう」
3 月	○第 2 回実態調査実施 ○研究のまとめ

3 本を介し、家庭や様々な人との関わりで読書意欲を高めた事例

＜昭島市立共成小学校＞

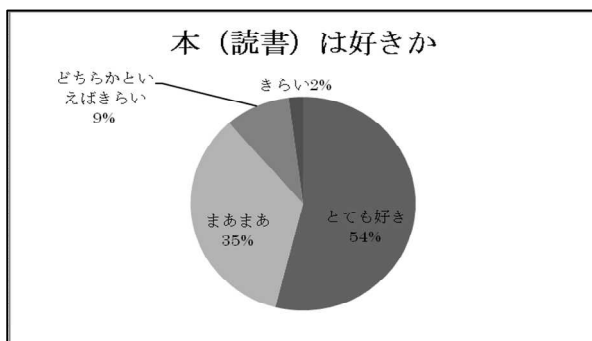
読書指南役：国語力向上支援員、司書教諭、教員、保護者、児童

1 児童が本を読まない理由

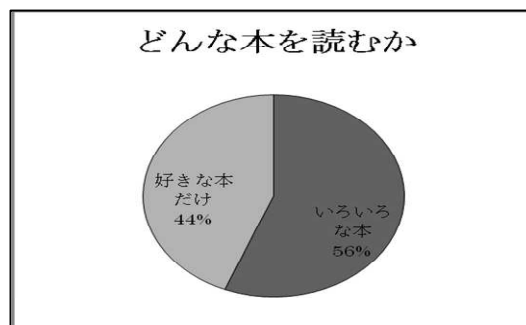
(1) 読書活動の現状

読書に関するアンケートを平成 22 年 4 月に実施し、次のような児童の読書状況をつかむことができた。

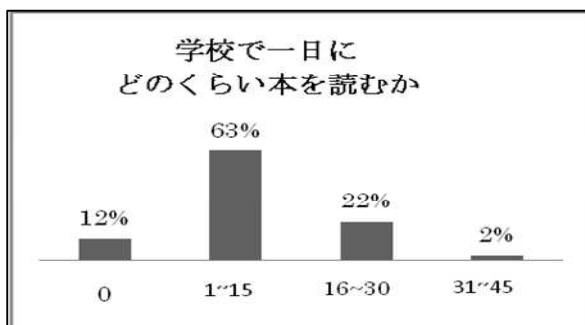
① 本（読書）が好きかどうかについて



② どんな本を読むか



③ 一日の読書時間について

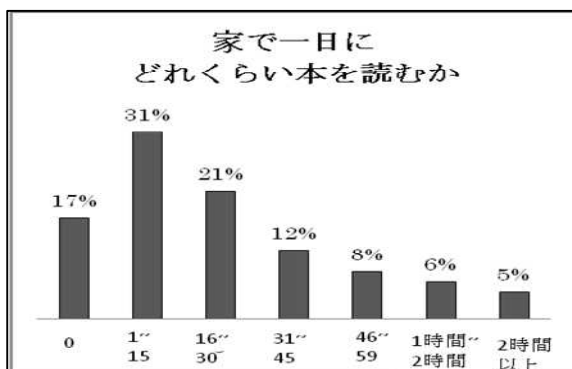


④ 4 月に読んだ本の数

全校児童平均 8.0 冊

⑤ 4 月の図書室利用回数

全校児童平均 5.0 回



全体として、本が「とても好き・まあまあ好き」という児童の割合は 89% と高いが、一方で「嫌い」とする児童、読書時間が「0」という児童が少数ではあるが存在する。全ての児童が本を手に取り、その楽しさに気付くようにしていく必要がある。また、読書に親しんでいる児童も、その約半数が、自分の好きな本だけを読むという傾向にある。学年別貸出ランキングの調査でも、上位に属する本が低学年も高学年も同じであり、児童の読書の質的な改善も望まれるところである。

(2) 学校における取組課題

(1)の結果を踏まえ、学校における取組課題を次の3点とした。

- ① 本〈読書〉が「嫌い」な児童の数を減らす。
- ② 読書時間0の児童を減らす。
- ③ いろいろな本を読む児童を増やす。

(3) 未読傾向の強い児童の本を読まない理由

なお、読書推進に当たっては、次のような、読書を「嫌い」とする児童、読書時間が「0」という児童等、未読傾向の強い児童が本を読まない理由について留意する。

- ・読書より運動が好きである。
高学年の読書嫌いの児童は、運動や外遊びが好きな児童に多い。
- ・ゆったりと読書をする時間がない。
6年児童で、1週間のうち3日以上放課後に予定がある者が9割以上である。
- ・「読む」ことに慣れていないので楽しめない。
読書があまり好きでない低学年の児童に、読解力など言語力の未熟さが伺える。

(4) 課題解決のための方針・改善策

ア 本を手に取りやすい環境をつくる

- ・国語力育成支援員を活用し、図書室の有人化を図る。
- ・休み時間の図書室開放を毎日行えるようにする。(昨年度まで週2回)
- ・2部屋に分かれていた図書室を1部屋に改築し、日本十進分類に沿った配架ができるようにする。
- ・図書資料のデータベース化を基に、パソコンによる貸出返却手続きができるようにする。
- ・テーマ展示を工夫する。展示や配架に公立図書館〈都立多摩図書館・昭島市民図書館〉から、アドバイスを受ける。
- ・公立図書館〈昭島市民図書館〉と連携し団体貸し出しや移管本等を活用し、学級文庫を充実させる。
- ・公立図書館の利用案内や利用指導を行い、その活用を促す。

イ 本に親しむきっかけをつくる

- ・学期に一回の読書週間(2週間)に取り組む。読書週間には「朝読書」と「読書貯金」に取り組む。更に特別企画(全校による「おすすめの本」掲示、「お話のお店」、「チャレンジ家読」)などを行う。
- ・担任による読み聞かせ、支援員による読み聞かせ、PTAボランティアによる読み聞かせ、更に教員集団による読み聞かせ(＝「お話のお店」)など、本との出会いとなる読み聞かせの取組を充実させる。
- ・全校で「家読」に取組、家族ぐるみの読書を啓発する。
- ・作家によるお話会を企画し、本や作家への興味関心を高める。
- ・様々な読書案内を行う。「子供が喜ぶ本100選」「貸し出しランキング」「市教研図書館部 おすすめの本」「ほん・本・ごほん」(多摩図書館より)「よい絵本(読書活動記録ノート)」(全国図書館協議会)などの配布
- ・校内研究とタイアップし、(国語の)授業を読書へつなげる指導の工夫を研究する。

2 具体的な実践事例

(1) 図書室の有人化

市の予算により配置された「国語力向上支援員」（図書館司書資格・読み聞かせボランティア経験有）を重点的に図書室に配置し、図書室有人化を行った。このことにより、次のような取組が可能となった。

- ・月～金の休み時間の図書室開放
- ・図書の時間の支援員による読み聞かせ
- ・学習や行事に合わせたテーマ展示
- ・支援員による児童や教員への読書支援（本を探す・紹介する・集めるなど）

なお、支援員の助力があり、本年度の図書室改修及びデータベース化がスムーズに迅速に進められ、また、この物理的改善が、前述のような支援員の取組の更に大きな推進力となっている。

(2) 「お話のお店」、「作家によるお話会」、「家読」

ア お話のお店

読書週間の特別企画として、次のように行った。（2学期）

- ・教員が、4つのグループに分かれ、それぞれが1つお話の読み聞かせをする。
- ・お話は図書室にある本から選ぶ。
- ・読み聞かせの仕方（役割読み、劇化など）は自由とする。
- ・読書週間中の2日間の昼休みに4カ所でお話のお店を開く。
- ・聞きたい子供たちが、聞きたい場所にいく。2回目は違うお店に行く。

行ってみよう！お話のお店！！
 20（水）25（月）昼休み
 ～メニュー～

ばいばい先生のお店 場所 算数学習室 お話 「ろくべえまってるよ」 森のろくべえに落ちてしまった犬のろくべえを助けようと、子どもたちがいろいろ工夫します。	ちゅうぎゅう先生のお店 場所 集会室 お話 「ふゆじたくのおみせ」 森のふゆじたくのおみせにはステキなお話がいっぱい。どんぐりをたくさん集めて、くまさんは、ヤマネくんは何を賣うのかな。
ちゅうぎゅう先生のお店 場所 視聴覚室 お話 「ソメコとオニ」 作者は、「モチモチの本」や「花さき山」を書いた高橋 隆介さんです。ある日ソメコは怖いオニのに、さらわれてしまいました。そして、ソメコは・・・。	せんり先生のお店 場所 図書室 お話 「はなさかじい」 日本の昔話として有名な「はなさかじいさん」のお話です。自分の知っているお話と比べながら、聞くのもおもしろいかもかもしれません。





3 学期には、読書週間中毎日、昼休みに、図書室で「お話のお店」を開いた。ブロックごとの教師集団に加え、図書委員会の児童も、役割読みなど工夫して進んでお店を開いた。教員も、小道具などを用い、楽しく熱演した。

イ 作家によるお話会

モデル事業企画として、学校公開日に絵本作家を招いて行った。1～3 年向け 4 5 分、4～6 年向け 4 5 分とし、内容については作家に一任したが、事前の打ち合わせにより、子供たちが楽しめるように、事前指導（歌、暗唱など）を行い、参加型のお話会とすることができた。また、校内図書展示スペースに、作品を展示し、読書へつながる事後指導も行った。



ウ 家読

読書週間の特別企画として行った。週間中の 2 回の金曜日、全学年宿題を「家読」とし、各学級で呼びかけ、月曜日の朝に様子を聞くなどした。

図書室だより No.7 より

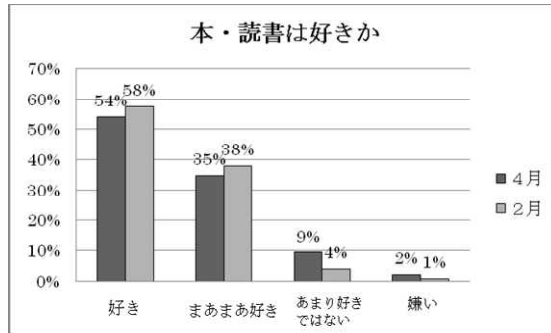
家読のヒント

- ※できそうなもの、やってみたいものにチャレンジしてみてくださいね！
- ☆家族で同じ本を読んで、感想を話し合う。
- ☆学校から借りてきた本の読み聞かせをする。読み手は大人でも子供でもよい。
- ☆15～30 分くらい、家族みんなで、好きな本を読む。できれば、一つの部屋に集まって読む。
- ☆家族みんなで図書館に行って、好きな本を読む。できれば帰りに本の話をする。

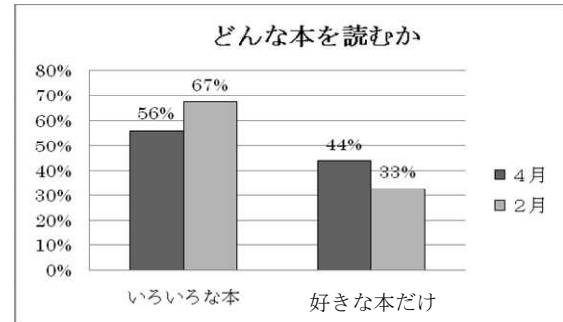
3 成果と課題

2月の3学期読書週間後にアンケートを行った。以下のように、4月の結果と比較することができる。

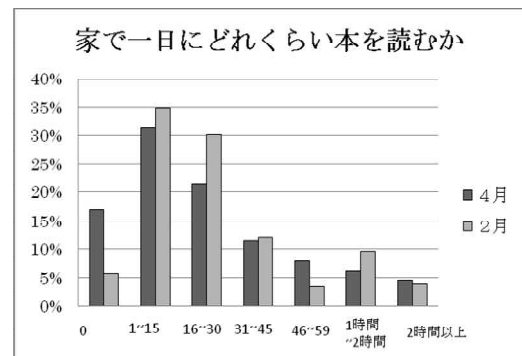
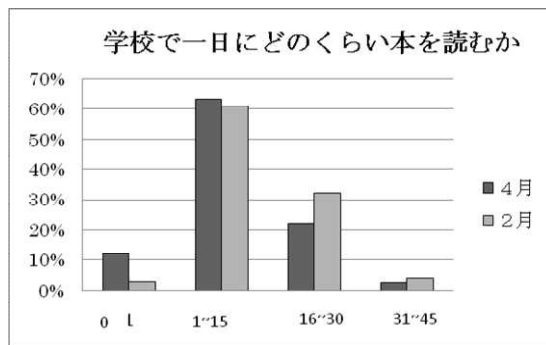
① 本（読書）が好きかどうかについて



② どんな本を読むか



③ 一日の読書時間について



④ 2月の読書週間(2週間)中に読んだ本の数

全校児童平均 12.4冊 (3~6年児童平均 1,068.4ページ)

⑤ 2月の読書週間(2週間)中の図書室利用回数

全校児童平均 5.9回

◆◆ 実践の考察と改善策 ◆◆

本好きの児童、児童の読書時間、読書量、図書室利用回数などを増やすことができたことについての考察は以下のとおりである。

(1) 図書室を有人化することは大変有効である。

児童用アンケートの記述欄に「図書室がきれいで行くのが楽しみになりました」という声がいくつも寄せられた。本年度行われた改修とデータベース化が大いに影響しているが、読みたい本と一緒に探してくれる、ときには一緒に読んでくれる人の存在こそが、児童に図書室の心地よさを提供していると言える。教員からも「図書室が使いやすくなった。」「安心して利用できる。」「すぐに相談にのってもらえて、授業に生かしやすい。」等の声があり、その効果がうかがえる。

(2) 様々な読み聞かせは、読書意欲を高める。

「お話のお店」「作家による読み聞かせ」は大変好評であった。日常行われる読み聞かせも児童は楽しみにしているが、更にひと工夫したことにより、特別な楽しさを感じることができたようである。「お話のお店」は読み手も聞き手も楽しめる企画となり定着しつつある。「作家によるお話会」では、児童から「いい本を作ってすごい。自分も本を作りたい。」という声も届いた。保護者からも「感動した。子供

とゆっくり作品を読みたい。」等という感想が寄せられた。予算の問題もあるが、作家に会うという特別な場の設定から得るものは大きい。

(3) 「家読」は共に読む楽しさをもたらす。

「家読」は予想以上の反響があった。家庭からの報告書によると、家庭によりいろいろな工夫があり、家族ぐるみの読書や親子のふれあいのきっかけとなったことがうかがえる。児童は他の宿題が出ず、全校「家読」という設定を喜んでいる面もあったが、低学年を中心に楽しめていた。保護者からは次のような報告が多数届いた。

- 一つの本を母と一緒に読みました。交互に読み合いました。テレビを消して、静かな時間を過ごすのはとても良かったです。子供も集中します。
- 学校で借りてきた本を家族で読みました。ドラキュラについての本だったので、みんなでドラキュラと戦うためには・・・など話し合ったりしました。いつもの読み聞かせと違って、話をしたりするのが楽しくて良かったです。
- 家族の前で、父と母が選んだ絵本を読んでくれました。先生になりきって読んでいました。とてもすてきな企画ですね。「本を読むこと」が家族一緒に習慣になることを願っています。わが家では2週間に1度、土曜か日曜に必ず家族で図書館に行きそれぞれ本を借ります。
- (高学年にもなってどうかと思いましたが)寝る前に10分くらいずつ、1冊の本を交替で声を出して読みました。小さいとき以来久々の読み聞かせが楽しかったようでした。最後は私の番のときに気付いたら寝ていました。(なつかしい感じがしました。)途中なのでまたやりたいです。

(4) 様々な取組と「自由に自主的に読む」読書の楽しさの兼ね合いに留意する。

アンケートなどから、特に高学年児童は、「自分で自由に読みたい」という傾向が見られる。有効な手立てとなった実践を継続したり、新たな取組を開発したりするとともに、それらを、多様なメニューとして、児童が自主的に選択できるような読書支援・読書指導を心がけることも必要である。

4 実践から見てくる、実践のための効果的なポイント

(1) 手渡しの読書指導（人的環境面）

様々な取組の中で、「この本面白かったよ。読んでみたら。」「今度読み聞かせをするから来てね。」「この本をみんなに読んであげてよ。」等の会話が、児童同士、教師と児童、支援員と児童の間で聞かれた。低学年への読み聞かせを自主的に企画し実行する高学年が現れた。家庭でも「これはお父さんも子供の頃読んだ本だよ。」というような話がされたと聞く。児童は自分に向けて手渡された本を喜んで開く。温かい言葉とともに本を手渡しするきっかけとなるような取組、読書指南役を増やしていく取組を工夫していくことが効果的である。



子供たちに声をかける支援員



PYA読み聞かせボランティア



2人読みを楽しむ子供たち

(2) 即応する読書指導（施設・環境面）

学習や行事に関するテーマ展示が適切に行われたり、読みたいとき調べたいときにすぐに図書室が利用できたり、貸し出しや返却が手軽にできたりすることは、児童の読書への意欲や関心を保持し、更に高める。そのような環境が提供できるよう工夫することは効果的である。できる限り、図書室の有人化、データベース化の方向で進めていくことが望ましい。



季節・行事に合わせた展示



鳥について調べる環境委員会



寒い日に面出しで展示されたお風呂の本

月	若草	１年	２年	３年	４年	５年	６年	関連行事
４	・読み聞かせを楽しむ。 ・本の扱い方を知る。	・読み聞かせを楽しむ。	・読み聞かせを楽しむ。	・好きな本を見つけて楽しく読む。	・図書館利用のきまりがわかり、正しく利用する。	・図書館利用のきまりを覚え、進んで活用する。	・図書館運営について理解し、協力をする	○15(木)委員長紹介 ○図書室利用開始 ○23(金)子ども読書の日
５	・読み聞かせを楽しむ。 ・図鑑や百科事典の使い方を 知る。	・読み聞かせを楽しむ。 ・本の扱い方を知る。	・読み聞かせを楽しむ。 ・本棚の整理整頓をする。	・いろいろな童話や物語を読む。 ・図書館でのマナーを守って読書する。	・いろいろな読み物を進んで読む。 ・漢字辞典、国語辞典の使い方を知る。	・読書の習慣をつける。 ・年鑑の使い方を知る。	・読書習慣を身に付け、読書を通して、自分の考えを深める。	○図書の購入
６	・絵本や好きな本を見つけて 楽しく読む。	・絵本を楽しく聞いたり、読 んだりする。	・好きな本を見つけて楽しく 読む。	・民話、伝記、説明文、科学的な読み物等に親しむ。	・民話、伝記、説明文、科学的な読み物等に親しみ、視野を広げる。	・日本や世界の名作、伝記、短歌や俳句、科学的な読み物等に親しむ。	・日本や世界の名作、伝記、歴史、地域の伝統、紀行文に親しむ。	○8(火)～18(金)読書週間 ○10(木)集会発表
７	・民話、昔話、図鑑等に親しむ。 ・「子供の喜ぶ本100選」「ほん・本・ごほん」などを知る。	・絵本や易しい読み物を楽し く聞いたり読んだりする。 ・「子供の喜ぶ本100選」「ほん・本・ごほん」などを知る。	・民話、昔話、図鑑等に親しむ。 ・「子供の喜ぶ本100選」「ほん・本・ごほん」などを知る。	・テーマを決めて読む。 ・「子供の喜ぶ本100選」「ほん・本・ごほん」などを知り、読書計画を立てる。	・テーマを決めて進んで読む。 ・「子供の喜ぶ本100選」「ほん・本・ごほん」などを知り、読書計画を立てる。	・興味のある分野の本を楽し く読み進める。 ・「子供の喜ぶ本100選」「ほん・本・ごほん」などを知り、読書計画を立てる。	・興味のある分野の本を進んで読み、考えを深める。 ・「子供の喜ぶ本100選」「ほん・本・ごほん」などを知り、読書計画を立てる。	○12(月)13(火)14(水)保護者会 ○移動図書館もくせい号の活用
８	・公立図書館の利用 ・読書感想カードに取組む。	・公立図書館の利用 ・読書感想カードに取組む。	・公立図書館の利用 ・読書感想カードに取組む。	・公立図書館の利用 ・読書感想カードに取組む。	・公立図書館の利用 ・読書感想カードに取組む。	・公立図書館の利用 ・読書感想カードに取組む。	・公立図書館の利用 ・読書感想カードに取組む。	○図書室改修工事・データベース 化作業
９	・いろいろな本を楽しく読む。 ・簡単な読書感想文を書く。	・おもしろかったところや好きなところを紹介する。	・読んだ本のおもしろさやよさを紹介し合う。	・読んだ本のおもしろさやよさを紹介し合う。	・読んだ本のよさや自分の感動を伝え合う。	・本を読んで心に感じたことや感動したことを伝え合う。	・参考になった本や心に残った本について紹介し合う。	○図書室リニューアルオープン
10	・国語の教科書の読み物に関連した本に親しむ。 ・読書感想カードに取組む。	・国語の教科書の読み物に関連した本に親しむ。 ・読書感想カードに取組む。	・国語の教科書の読み物に関連した本に親しむ。 ・読書感想カードに取組む。	・国語の教科書の読み物に関連した本に親しむ。 ・読書感想カードに取組む。	・国語の教科書の読み物に関連した本に親しむ。 ・読書感想カードに取組む。	・国語の教科書の読み物に関連した本に親しむ。 ・読書感想カードに取組む。	・国語の教科書の読み物に関連した本に親しむ。 ・読書感想カードに取組む。	○14(木)委員長紹介 ○18(月)～29(金)読書週間 ○28(木)集会発表 ○27～11/3 全国読書週間
11	・本で調べる。(動物、乗り物、花等、身の回りにあるもの)	・本で調べる。(動物、乗り物、花等、身の回りにあるもの)	・本で調べる。 (地域、自然、図鑑等)	・目的に合った本を選んで読む。	・本で調べたり、雑誌、新聞、資料などを利用したりする。	・情報収集の方法や資料の利用の仕方を考える。	・情報収集の方法や資料の利用の仕方、整理の仕方を考える。	○読書活動推進モデル事業特別 企画お話し会
12	・冬休みに読みたい本を選ぶ。 ・いろいろなジャンルの本に親しみ、よさを紹介し合う。	・おもしろい本を教え合い、進んで読書する。	・おもしろい本やよい本を教え合い、進んで読書する。	・いろいろなジャンルの本に親しみ、よさを紹介し合う。	・よい本を紹介し合う。 ・冬休みの読書計画を立てる。	・心に残った本を紹介し合う。 ・冬休みの読書計画を立てる。	・参考になった本、印象深い本を紹介し合う。 ・冬休みの読書計画を立てる。	○13(月)14(火)15(水)保護者会
１	・いろいろなジャンルの本に親しみ、よさを紹介し合う。	・本で調べる(お正月の遊び、身の回りにあるもの等)	・本で調べる。 (お正月の遊び、おもちゃの作り方等)	・図鑑や百科事典の使い方を 知る。	・図鑑、辞典、百科事典、新聞・雑誌等を進んで活用する。	・目的に応じて、適切な本や資料を選び、進んで調べ学習に役立てる。	・目的に応じて、適切な本や資料を選び、効果的に活用する。	○児童用検索 PC 使用開始
２	・長い文を楽しく読む。	・長い文を楽しく読む。	・長い文を楽しく読み通す。	・興味をもった長編作品を読み通す。	・興味をもった長編作品を楽しく読み通す。	・読書を通して、考えを広げたり深めたりする。	・読書を通して、考えを深め、自分を見つめ直す。	○7(月)～18(金)読書週間 ○次年度図書指導計画
３	・高学年が低学年に読み聞かせをする。 ・読書活動について自己評価 をする。	・読書活動について自己評価 をする。	・読書活動について自己評価 をする。	・読書活動について自己評価 をする。	・読書活動について自己評価 をする。	・読書活動について自己評価 をする。	・読書活動について自己評価 をする。	○蔵書の点検、図書館整備

4 司書教諭と学校司書と連携し、図書館整備と都立図書館との連携を促した事例

＜武蔵村山市立第五中学校＞

読書指南役：学校司書・司書教諭・図書委員

1 生徒が本を読まない理由

(1) 個人に関すること

おもしろい本がない	38%
面倒くさい	36%
好きではない	31%

朝読書を毎朝やってはいるが、なかなか読書に向かわずぼーっと時間を過ごしている生徒のほとんどがどの本を読んでいいのかわからなかったり、面倒くさいからと読書を避けていたりする。

(2) 社会環境に関すること

ゲームの方が楽しい	70%
漫画の方が楽しい	68%
携帯電話の方が楽しい	48%

家庭で本を全く読まない生徒がほとんどで、家庭に本がない生徒も多い。また、学区域に本屋がほとんどなく市立の図書館の開館時間には行くことが出来ない。ゲームや携帯電話等が普及し、ゲームや携帯電話で時間を多く

取られる生徒も多い。調べ学習等も本を使わなくてもインターネットで調べる方が手軽であるため、学校の調べ学習にもパソコンが使われている。

(3) 物的環境に関すること

時間がない	51%
部活動が忙しい	37%
勉強が忙しい	31%
趣味で忙しい	31%

本校は部活動への加入率が高く（90%程度）4月～10月は6：30まで11月～2月は6：00まで部活動を行っている。また土日の活動も多い。また、塾や習い事等に多くの生徒が通っている。そのため読書をする時間が取れない生徒が多い。

◆ 読書活動の現状 ◆ （平成22年2月の調査から）

◇ この1ヶ月読書状況について

学年	①はい	②はい	③はい	④はい	⑤はい
1年	94%	67%	35%	14%	20%
2年	52%	62%	28%	17%	13%
3年	58%	70%	40%	8%	12%

- ①本を読みましたか。
- ②雑誌や学習漫画を読みましたか。
- ③パソコン及び携帯電話を使って本や新聞、雑誌を読みましたか。
- ④学校図書館で本を借りましたか
- ⑤公立の図書館で本を読んだり借りたりしましたか。

◇ 本を読むことが好きですか

	ア	イ	ウ	エ
1年	30%	47%	19%	4%
2年	23%	42%	23%	12%
3年	35%	41%	13%	11%

ア、好き
イ、どちらかといえば好き
ウ、どちらかといえばきらい
エ、きらい

◆ 考察 ◆

- ① 上記のアンケートの結果から1年生では読書をしている生徒が多いことが読み取れるが本校では昨年度から「朝読書」に全学年で本格的に取り組始め「読書記録」もつけ始めた。また、1年生へのオリエンテーションも始めたことの成果ではないかと思われる。
- ② 学年が進むにつれて部活動や勉強が忙しくなって来るためか読書への関心が薄れてきている。（特に2年生での落ち込みが激しい）また、精神面の発達に伴い、本の選び方も難しくなってきたように思う。

◆ 課題 ◆

- ① 1年次からの取組や学年での朝読書への取組が生徒の読書量に大きく影響することはアンケートからも分かった。1年次のオリエンテーションのもち方や学年での朝読書への取組方（全校で朝読書は始めたが、学級や学年によってかなり差が出てしまった）が今後の課題である。
- ② 学級文庫の本は比較的読みやすいものが多く、学年が進むにつれて物足りなさを覚える生徒もいる。またどういう本を読んだらいいのか分からない生徒も多い。図書室に来れば、相談に乗ってもらえるように学校図書館司書との連携や生徒を来室させるための工夫が今後の課題である。

◆ 改善策 ◆

家庭ではなかなか本を読む時間が取れない現状のなかで、なんとか学校で本を読ませたいと思っている。そのためには朝読書を更に充実させていることや生徒が図書室に足を運び本に親しむ機会を増やすための様々な取組を行った。
(取組については実践例で紹介)

2 実践例

(1) 環境の整備の取組

ア 図書室の机・棚の配置換え。今までは大きな机を二つ並べ、その周りにいすをおいていたが、机を一つ一つにし、多くの生徒が利用できるようにした。棚の位置を変えて、生徒が手にとって見やすくした。

◆配置換え前◆



◆配置換え後◆



◆本の展示◆



イ 一番生徒に読まれている日本文学の棚の本を作者の五十音別配列し、本を探しやすくした。

ウ 新着本やお薦めの本は展示したり図書委員のお薦めのカード（ポップカード）をつけたりした。

◆ポップカード◆



◆ポップカード◆



◆新着本の展示◆



(2) 図書室の利用推進の取組

ア 4月に1年生を対象としてオリエンテーションを行った。

- ・十進分類法について
- ・本の扱い方について
- ・図書カードの作成
- ・読書相談
- ・詩の読み聞かせ



イ 読みきかせ

毎月1～2回放課後に読み聞かせを行った。

最初は学校図書館司書の方からであったが、生徒の希望もあり、図書委員の読み聞かせも行った。最初は図書委員が声をかけて友達を連れてきていたが、次第に自主的に参加する生徒が増えてきた。



ウ 各教科で図書室を利用してもらう取組

- ・図書購入時に各教科の要望を聞く。
- ・各教科関連書籍のPR
- ・要望に応じて必要な本をそろえる。（授業で必要な書籍の要望があったときは市立図書館とも協力して学校図書館司書の方が本を揃える）

◆各教科の利用状況◆

社会・・・「人物調べ」本の貸し出し

国語・・・「読書紹介カード作り」「本の紹介スピーチ」本の貸し出し

家庭・・・「手作り絵本」図書室で授業を行い、絵本を読ませる。

総合・・・「修学旅行」「移動教室」「校外学習」「職業調べ」参考資料の貸し出し

選択家庭・・・「料理しらべ」

エ 「図書館便り」の発行

- ・ 司書から本の紹介や図書室の利用について ・ 図書委員から本の紹介について

(3) 読書の推進に向けて

ア 朝読書の推進

- ・ 8：25～8：35を朝読書の時間として全校実施（月曜日をのぞく週4日間）
- ・ 読書記録のためのノートの活用（書名・一言感想などを記入する）
- ・ 年間目標冊数の設定（15冊を目標とする） ・ 学級文庫の充実

朝読書が始まった当初は自分で本を用意させていた。すると本を用意してこない生徒が多く、本がないからという理由で読書をしない生徒が多く見られた。そこで学級文庫という形で各クラスに40冊程度の本を置き、図書委員が管理をすることとした。また、本を読むことが苦手な生徒も多いため、学級文庫の本は短時間でも読めるものを揃えることにした。（星新一のちょっと長めのショートストーリー・中学生のためのショートストーリーズなど）



イ 読書紹介

- ・ 「お薦めの本」を紹介するポスターを作成させ、そのポスターを使って全員がスピーチを行った。興味を持った本を3冊選ばせ、読むように促した。ポスターは図書室や校内に掲示した。

ウ 手作り絵本

- ・ 3年生の家庭科の課題として絵本を作り、できあがった絵本の読み聞かせを行った。作成の段階で多く絵本にふれ、工夫することができた

エ ブックトーク

- ・ 都立多摩図書館の方2名をお招きして「危機一髪」というテーマで7冊の本を紹介して頂いた。



3 成果と課題

◆ 読書活動の現状 ◆ （上段は22年2月のもの下段は23年2月のもの）

◇ この1ヶ月読書状況について

学年	①はい	②はい	③はい	④はい	⑤はい	
1年	94%	67%	35%	14%	20%	①本を読みましたか。
	94%	66%	33%	13%	12%	②雑誌や学習漫画を読みましたか。
2年	52%	62%	28%	17%	13%	③パソコン及び携帯電話を使って本や新聞、雑誌を読みましたか。
	96%	65%	32%	29%	20%	④学校の図書館で本を借りましたか
3年	58%	70%	40%	8%	12%	⑤公立の図書館で本を読んだり、借りたりしましたか。
	56%	62%	38%	4%	6%	

◇ 本を読むことが好きですか。

	ア	イ	ウ	エ
1年	30%	47%	19%	4%
	30%	46%	18%	6%
2年	23%	42%	23%	12%
	37%	41%	12%	6%
3年	35%	41%	13%	11%
	34%	46%	15%	5%

ア、好き イ、どちらかといえ
ば好き
ウ、どちらかといえはきらい
エ、きらい

図書室の利用状況

	来室者数	貸出冊数
21年度	3,738人	247冊
22年度	4,394人	336冊

昨年度と今年度の読書活動の現状を比較してみると「朝読書」を各学年で実施しているためほとんどの生徒が本を読むようになってきていることが分かる。（3年生は私立高校の受験や都立高校の受検があったため「朝読書」を実施することができず、本を読んでいる生徒はあまり多くなかった。）また、来室者数も、貸出冊数も増えてきている。これは様々な取組の成果であると思う。しかし、「朝読書」を実施しているにも関わらず、ごく少数ではあるが「本を読もうとしない生徒」がいることも事実である。また、本を読むことが好きな生徒もあまり増えていない現状もある。今後更に「読書の楽しみ」を知らせていくための取組を行いたい。

◆ 様々な取組の成果と課題 ◆

(1) 環境の整備の取組について

「図書室きれいだよね」という声も聞かれるようになり、図書室に来ることを楽しみにしている生徒も多くなった。また図書室入り口の棚に置かれた図書新聞を読む生徒も増えてきた。生徒に図書室へ足を運んでもらうという試みはある程度成功しているとは思いますが、図書室に来ることから本をじっくり読む・本を借りるという次の段階への取組が今後必要である。

(2) 図書室の利用推進の取組

図書室の場所が3階の一番端に位置していて、行きにくい場所であるにも関わらず、学校図書館司書の方のご尽力もあり、確実に図書室の利用者は増えてきている。しかし、最大の問題は時間がないことである。学校行事、定期考査、部活動、塾、習い事などで多くの時間を取られ、本を借りても読む時間がない生徒も多いし、「読み聞かせ」を放課後行っても部活動のある生徒は参加できない現状である。しかし、「読み聞かせ」の楽しさは次第に浸透し、また図書委員も「読み聞かせ」にさまざまな工夫を凝らし、より楽しめるように努力をしている。「読み聞かせ」の参加者は毎回30人前後になっているし、「読み聞かせ」をきっかけに図書室を訪れる生徒も増えてきている。今後、図書委員による「読み聞かせ」を継続して実施していくとともに「ブックトーク」も行っていきたい。また、各教科での図書室の利用を更に推進するとともに、読書相談にものっていけるようにしていきたい。

(3) 読書の推進に向けて

朝読書は定着し、どのクラスも静かに本を読んでいる姿が見られるようになってきた。読書ノートの記入については書き忘れや感想をまとめることの出来ない生徒も多く、今後指導が必要である。また、学級文庫を充実させたため本がないから読まないということとはなくなったが、図書室に行って本を借りなくても済むようになってしまうのは問題だと思う。現在は短時間で読める本が多いが、今後は内容的にも充実させていきたい。朝の読書から家庭での読書へつなげていくことが最大の課題である。夏休みのしおりに書かせた感想をまとめ、みんなに知らせていくことや読書感想文コンクールへの参加なども今後は考えたい。読書紹介は好評だったので、今後も続けていきたい。

ブックトークは大変好評で、読書活動の推進には有効である。今後は1年生を対象に早い時期に実施していきたい。

4 実践から見えてくる実践のための効果的なポイント

(1) 人的環境

オリエンテーション・読み聞かせ・図書室の整備など全てを学校図書館司書の方を中心に実施してきた。図書室の開館時にも多くの生徒に読書相談を行っている。また、学校図書館司書と司書教諭、図書担当が連携を密にし、協力し合って年間の指導計画を立てるとともに図書委員の指導、各教科との連携、読書指導を行ってきた。読書活動を推進する上で学校図書館司書の常駐は欠かせない。

朝読書の声掛け・学級文庫の管理・読み聞かせ・図書館便り・図書室整備、ポップカード作りなどで図書委員が活躍をしている。生徒からの呼びかけは有効であり、今後も図書委員会の指導には力を入れていきたい。

(2) 施設環境

学校図書館司書の方と協力をして図書室の環境を整備してきたが、きれいで利用しやすい図書室にしたことにより、図書室へ関心も高まったように思う。また図書室をきれいに使おうという意識も生まれてきた。

(3) 授業での活用

各教科の授業で図書室を利用してもらうことが読書を推進することにつながっている。各教科の授業で図書室を利用してもらうためには図書購入時に各教科の要望を聞くこと、蔵書をPRすることなどが大切である。

◆ 年間計画 ◆

4月	○1年生を対象に図書室オリエンテーション ・図書室の使い方やNDC・おすすめの本の紹介と読み聞かせ ・図書貸し出しカードの作成→全員が本を1冊ずつ借りる。 ○図書委員の指導（読書推進役として意識付け） ○学級文庫の配布
5月	○図書購入アンケート ○講師をお招きしてブックトーク
6月	○図書購入
7月	○3年生「手作り絵本」の作成 ○2年生「歴史上の人物調べ」→必要な図書の貸し出し ○1、2年生「読書紹介カード」の作成→必要な図書の貸し出し
8月	○図書室の整備
9月	○1、2年生国語の時間に本の紹介、スピーチ。
10月	○図書委員の指導（読書推進役として意識付け）
12月	○移動教室の事前学習
1・2月	○遠足の事前・事後学習
3月	○読書アンケートの実施 ○学級文庫の整理
通年	○全学年「朝読書」 8：25～8：35 各クラスで朝読書 「読書ノート」の記入 - 学級文庫の充実（各クラス朝学習のために40冊程度の本を学級文庫として4月当初に配布し、毎週金曜日に図書委員がチェック） ○図書室だよりの発行（学校司書・図書委員） ○学校司書・図書委員による「読み聞かせ」「ブックトーク」 5月以降月2回程度

5 司書教諭が読書活動のコーディネーターとなり図書委員会も読書指南役とした事例

＜町田市立町田第二中学校＞

読書指南役：司書教諭・図書指導員・図書委員

1 児童・生徒が本を読まない理由

(1) 個人に関すること（個人的要因）

- ア 部活動、習い事、塾通い等で本を読む時間がない。
- イ 小さいころからの読書習慣がない。

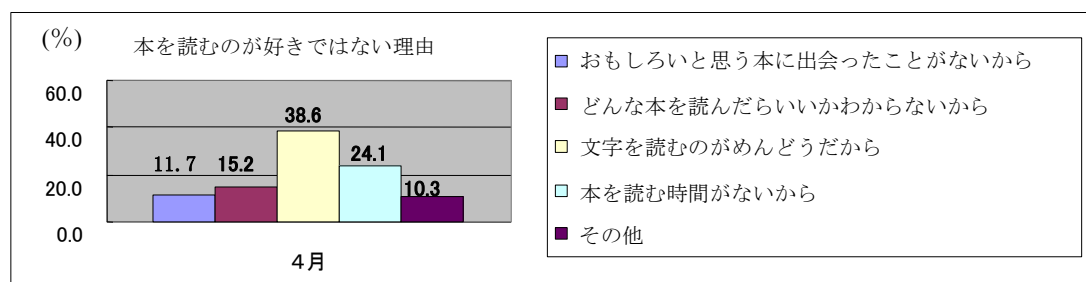
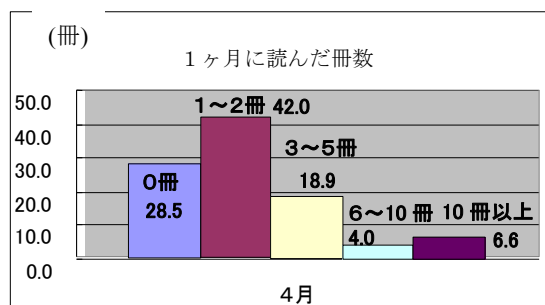
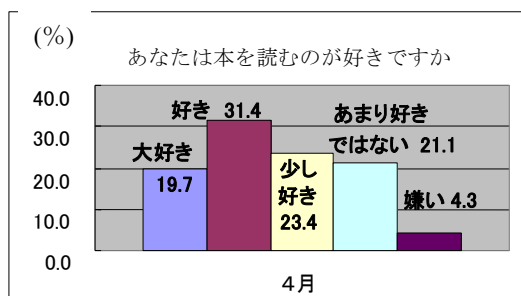
(2) 社会環境に関すること（社会的要因）

- ア インターネットや携帯電話の普及、ゲームやテレビにより、文字に触れる機会が少ない。そのため文字を読むのが面倒。

(3) 物的環境に関すること（物的要因）

- ア 放課後の学校図書館開放が毎日行われていない。（図書館につく大人がいない）
- イ 面白いと思う本に今まで出会ったことがない。
- ウ どんな本を読んだらいいのかわからない。

◆ 全校読書アンケートより（4月） ◆



2 具体的な実践事例

(1) 図書オリエンテーション

学校図書館の利用の仕方や日本十進法などのオリエンテーション。（全学年）
専門家のブックトークを取り入れる。（3年）司書教諭、図書指導員によるオリエンテーション。一人一冊、本を貸し出す（1年）国語科担当によるオリエンテーション（2年）企画は司書教諭。蔵書のコンピュータ化は、副校長が図書指導員と連絡を取りながら進め、生徒全員の図書貸し出しシールの準備を整える。

中央図書館訪問

(2) 町田市立中央図書館訪問

図書館指導員による図書館利用方法の説明後、本を一冊借りる。訪問を機に、生徒は市立図書館の貸出カードを作成。司書教諭は訪問の計画と貸出カード作成の手続きを行う。（1年）



(3) 総合的な学習の時間での調べ学習

ア 市内の団体貸し出しで 150 冊程度、環境学習に関する本を借り、移動教室に向けて調べ学習を行う。司書教諭と学年図書担当で本を借りる。（2年）

イ 調べ学習の方法を学び、興味のある本を借りて調べ学習を行う。（1年）
司書教諭が調べ学習の方法のプリントを作成し、担任がクラスで指導にあたる。

紙芝居の実演

(4) 図書委員による活動

ア 市内の図書に関する施設紹介→自作の紙芝居を実演して紹介。司書教諭が計画、指導にあたり、図書指導員も参加。

イ「中学生図書司書」認定証の取組

図書館事務、読み聞かせ、ブックトークの単位を全て取得した生徒を「中学生図書司書 初級」として認定。選択としてブッカーかけ、分類法の単位を設ける。司書教諭が企画し、読み聞かせとブックトークの指導をする。図書館事務とブッカーかけの指導は図書指導員と図書ボランティアが行う。

ウ 学年の生徒を対象とした図書委員によるブックトーク（1、2年）
4つのテーマでブックトークを実施。ブックトーク指導として多摩図書館の方を講師に招く。司書教諭が計画・指導を行い図書指導員とともに発表にも参加する。



(5) 全校読書週間

図書委員によるブックトーク



絵本の読み聞かせ指導



絵本の読み聞かせ



朝の学校図書館開放

ア 図書委員対象とした絵本の読み聞かせ指導。（教育委員を講師に招く）

イ 朝礼での学校長による絵本の読み聞かせ。

ウ 図書委員による絵本の読み聞かせ。（読書週間の初日に実施）

エ 学年文庫の取組。（全学年）司書教諭の企画のもと、職員の協力を得る。

オ 朝の学校図書館開放。（図書指導員がつく）

(ア) 教科での取組

- a 3年英語（多読授業） b 2年美術（感想画）
- c 1年国語（本の帯を作ろう）



多読授業



感想画

(イ) 司書教諭と図書指導員の連携

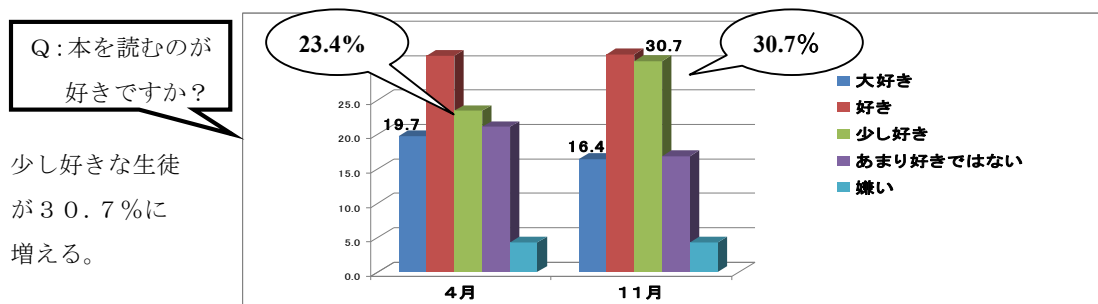
- a 司書教諭、図書指導員による図書委員を対象としたブックトーク
- b 10冊以上読んだ人の表彰。（学期ごと）賞状は図書指導員が作成する。
- c 図書便りの発行（図書指導員、図書委員会）

(ウ) 先生方による本の紹介

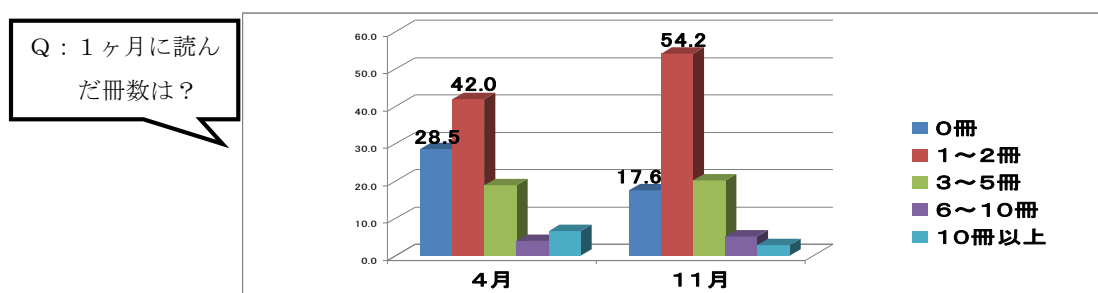
学年の教員が一人ずつ、お薦めの本を紹介する。（1年）

3 成果と課題

(1) 本を読むのがあまり好きでない生徒が少し好きな生徒に変わった。



(2) 1ヶ月間に一冊も読んでいない生徒の人数が28.5%から17.6%になり、
1～2冊読む生徒が42.0%から54.2%になった。



(3) 図書委員になる前となった後で、読書について64%の生徒に変化が見られた。

・本を読むことについて、見られた変化内容（図書委員対象アンケートより）

- (ア) 本の楽しさを知ることができた。 (イ) 前より本を読むようになった。
- (ウ) 本を図書室で借りるようになった。 (エ) 違う種類の本も読むようになった。
- (オ) 考え方が広がった。

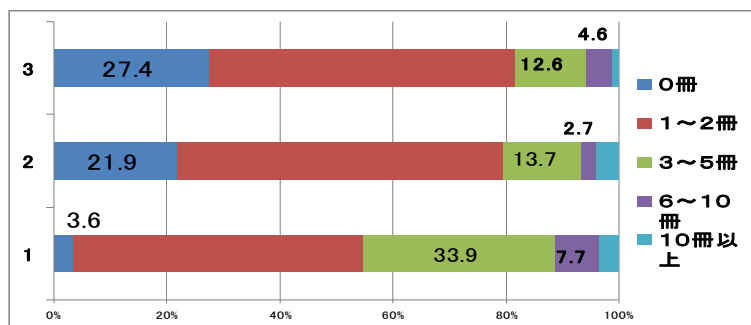
(4) 地域の図書館との連携が強まった。

図書館訪問や団体貸し出しで、地域の図書館のお世話になった。また、図書委員による市内の施設紹介やブックトークでは、地域の図書館の方を学校に招待した。

(5) 読書の積極的な取組を入学当初から、計画的・意図的に行ってきた1年は、中学校に入ってから途中で取組を始めた2、3年より良い結果を得ることができた。

1ヶ月に読んだ冊数の
学年別グラフ(11月)

1年で0冊の生徒は
3.6% 3冊以上読んだ
生徒は 55.2%という結
果になった。



(6) 授業での図書室利用がまだまだ少ない。

地域の図書館との連携では、総合的な学習の時間の団体貸し出しだけでなく、各教科の授業で学校支援貸し出しなどができるようになるとうい。もっと図書を使った授業が行われるようにし、調べ学習での本の利用を増やすことが課題である。

4 実践から見てくる実践のための効果的なポイント

(1) 生徒（図書委員）が読書指南役となる。

図書委員が自分のクラスで絵本の読み聞かせを行ったあと、昼休みなどに図書当番の図書委員に、「絵本を読んで」と言ってくる生徒が出てきた。少しずつではあるが、図書委員が読書活動のリーダーとして育っている。2年のブックトーク終了後には、紹介された本を探しに図書室に生徒がやってきた。紙面による紹介以上に、人による本の紹介には効果があるといえる。外部の専門家、司書教諭や図書指導員から図書委員に専門的知識を伝え、実際には図書委員が読書指南役となって、読書活動を推進していくことが効果的であることがわかった。

(2) 学年（学校）の教員が読書指南役となる。

1年で行った教員による本の紹介では、「自分のあこがれの先生が本を読んでいることを知り、本を読むことは堅苦しいと思っていたイメージが変わった。」など、本を読むことは楽しいというイメージを生徒の間に作ることに成功した。

(3) 興味のある本を手にとらせる。

図書オリエンテーションや地域の図書館訪問で読書カードを渡した後、すぐに興味をもった本を借りるという機会を作り、本を手にとらせた。また、1年で行った調べ学習では、自分は一体何に興味があるのかをブレイン・ストーミングさせ、その後、興味を持った本を図書館で借りてくるという課題を出した。このような、生徒全員が本を手にとる取組を

計画的に行うことには効果があることがわかった。

(4) 行くと楽しい学校図書館づくり

「明るく、新しい発見がある学校図書館」、「スムーズに本の貸し借りができ、リクエストにすぐ応じる学校図書館づくり」を図書指導員や図書ボランティアとともに進めた。蔵書管理のコンピュータ化で貸し出し状況を把握できるようになり、貸し出し数の多い生徒を図書新聞や賞状などで励ませるようになった。コンピュータ化は、本と生徒を近づけるのに大きな効果をもたらしたといえる。入り口に近いところに新着本を置いたり、話題の本のコーナーを作ったりした。また、生徒がくつろいで好きな本が読めるようにツールを置いた。環境が変わったことで、学校図書館に来る生徒数も増えた。生徒の教室のすぐ隣にあることも来館者数と関係している。

(5) 組織的・計画的な読書活動の推進

前年度より副校長を中心に蔵書管理のコンピュータ化を進めたことで、4月のオリエンテーションで全校生徒に図書カードのシールを配るという良いスタートを切れた。また、読書週間前の全校朝礼で、校長が絵本の読み聞かせを行うなど、管理職が率先して読書活動の推進に臨んだことで、生徒の読書への意識を高めさせることができた。更に、進路指導部として、「読書に関するアンケート」をまとめたり、進め方について司書教諭からの相談に応じたりしたことで、読書指導がスムーズに進んだ。

(6) 地域の力・資源を活用する。

蔵書管理のコンピュータ化は、地域のボランティアの方のご協力で準備を進めることができた。また、団体貸し出しや中央図書館訪問など地域の資源を活用することに努めた。更に、図書委員によるブックトークの発表（4回）に、中央図書館の職員に見学に来ていただき、交流を深めることができた。

◆◆ 図書委員によるブックトーク ◆◆

(1) 発表までの準備の流れ

- 12/16 ブックトークの説明後、ブックトークで紹介する本を選ぶ。「『扉をあけて』～56冊の本」の中で学校図書館にある本や、司書教諭が読んで良かった中学生向けの本を、大まかなテーマごとに机の上に置いておき、興味を持った本を生徒が選んだ。
- 1/13 読んできた本のあらすじを紹介しあい、テーマを決める。
- 1/20 多摩図書館の方によるブックトーク（図書委員対象）
『扉をあけて』の中から『秘密』をテーマにしたブックトークをしてもらい、導入の仕方や盛り上げ方、本と本とのつなぎかたなどを学ぶ。
- 1/27 ブックトークの流れを決める。発表の細案を作成する。
- 2/3、2/8 1年リハーサル
- 2/10、2/14 2年リハーサル

(2) 1・2年生図書委員によるブックトーク（4つのテーマごとに発表）

プロジェクターで読み聞かせの絵本の絵や本の表紙をスクリーンに映し出して、テーマにあった本を紹介していく。

- 2/9(水)5校時 **テーマ：家族** 『あそこはフリードリヒがいた』
『エリカ』『シロクマたちのダンス』など
- 2/14(月)1校時 **テーマ：秘密** 『楽園のつくりかた』『宝島』
『クラバート』など
- 2/15(火)5校時 **テーマ：青春** 『エイジ』『空色の地図』『バッテリー』など
6校時 **テーマ：いじめについて考える** 『温室デイズ』『カラフル』『ハッピーバスディー』など

(3) 生徒の感想

- ア あまり本を読まないから、本の紹介はすごく印象に残った。図書委員の分かりやすい説明で色々な本を読んでいきたいという意欲がわいた。
- イ このような機会を作ってくれたおかげで興味を持った本が沢山あったので、普段からやってほしいと思います。
- ウ 私は、普段あまり本を読まないの、これをきっかけに、今回のブックトークで紹介された本を読んでみようと思いました。
- エ 図書委員の本を読んでもくれた人達が、良いタイミングで読むのを終わらせていたので、続きがとても気になりました。
- オ 図書委員の本の紹介の仕方がとても上手で、どの作品も全て読んでみたい！と思いました。

◆◆平成22年度 司書教諭、学習指導部、図書館指導員、図書ボランティアの活動年間計画 ◆◆

	司書教諭	各学年の総合的学習担当 (国語科、委員会担当)	図書館指導員、 図書ボランティア
4	●図書館利用の基本講習の準備（学級単位） 本の各部の名称、本の取り出し方、本の分類、図書室・図書利用法など クイズ形式のものも取り入れる ●図書委員会指導 生徒総会の取組 ●ブックトーク・読み聞かせ（３年） 多摩図書館の方を講師に招く		●図書委員会向け講習会 図書指導員による図書室運営の基礎、貸し出し手続や蔵書管理・修理等の講習会 ●昼休み、放課後の図書貸し出し返却事務、 ●図書室環境づくり (年間を通じて行う)
	●読書アンケート（全校） 良く読まれる本、未読者・多読者の調査分析と働きかけ		
5	中央図書館訪問の概要を考える。 団体貸し出しで本を借りる。	●中央図書館訪問(1年) 図書カードの手続き	↓
		●団体貸し出しによる調べ学習（２年）：環境学習	
6	●調べ学習(1年) 調べ学習の要項作成。 ●図書委員会発表（１年） 図書委員会指導		↓
7			●１学期間に１０冊以上読んだ人への賞状
	●紙面による推薦図書の紹介（教職員・保護者・地域の方々）		
8			●夏休みの学校図書館開放
9	●先生方による本の紹介（１年） ●図書委員会指導（１～３年）ブックトーク		
10	●図書委員会指導（１、２年） 本の読み聞かせの仕方について		
11	●読書週間（全校） 全校一斉朝読書 図書委員による読み聞かせの指導 ●読書アンケート（全校） 良く読まれる本、未読者・多読者の調査分析と働きかけ		
12	●「中学生図書司書」認定証の取組（１、２年）		●２学期間に１０冊以上読んだ人への賞状
1	●図書委員会指導（１、２年） ブックトーク（多摩図書館の方を講師に招く）		
2	●図書委員会発表 ブックトーク（１、２年）		
3	●ブッカーかけ講習会 図書委員対象		●３学期間に１０冊以上読んだ人への賞状

読書活動推進の実践例

高等学校編

生徒の読書状況に応じた取組

1 学校図書館・読書環境の整備に重点をおいた事例

〈都立広尾高等学校〉

パターン1：読書意欲はあるが、受験勉強等で多忙な場合

1 読書状況の課題

- (1) 1、2年生の場合（調査は、生徒の読書状況アンケート、1年生231名、2年生190名。
平成22年5月実施）
- ア 本の借り方が分からない、面倒くさいという生徒が多い（個人的要因）
 - イ 勉強や習い事が忙しい（1年18%、2年20%）
部活動が忙しい（1年15%、2年26%）（社会的要因）
 - ウ 読みたい本がない（1年40%、2年37%）
教室が別棟1、2階にあり、管理棟3階の図書館とは物理的に遠い。（物的要因）
- (2) 3年生の場合（調査は、平成21年度図書館利用統計より）
- ア 2年次に学校図書館で一年間一冊も本を借りたことがない生徒（92%）
読みたい本がないという生徒が多い。（個人的要因）
 - イ 3年生は受験勉強が忙しく、本を読む時間がない。（社会的要因）
 - ウ 3年生の教室は図書館と同じフロアにあり、空き時間には学習室として利用している
ため、ゆっくり読書をする環境ではない。図書館が狭い（物的要因）

2 課題解決のための方針と改善策

(1) 方針

- ア 利用が少ない1、2年生の読書状況の改善を図る。
- イ 受験生のための大学受験資料コーナーの設置及び利用促進

(2) 改善策

- ア 学校図書館内の雰囲気作りと、図書館に来ない生徒の読書啓発に力を入れる。
- イ 学校図書館から進学及び受験のための情報を発信する。3類（受験資料）の3年生貸出は4月→0冊を10月→10冊以上にする。

(3) 具体的な取組

- ア 「広尾高校図書47冊」、「夏休みのおすすめ本」、「広高図書館だより」発行
 - (ア) 廊下の掲示板を利用した読書啓発
 - (イ) 昇降口の掲示板を利用した読書啓発
 - (ウ) 図書委員会による読書活動

(エ) ヤングアダルト本コーナーやテーマ別コーナーの設置

イ 大学受験資料コーナーの設置

(ア) 受験資料を紹介した図書館便りの発行

(イ) 小論文対策のためテーマ別図書の資料をそろえた。

3 課題解決

(1) 1、2年生の読書状況の改善

ア 読書指導に力を入れる。

(ア) 「広尾高校図書47冊」（各教科等の教職員が選んだ課題図書小冊子）を1、2年生に配布する。

(イ) 「夏休みのおすすめ本」及び「広高図書館だより」（プリント）を、全校生徒に配布する。

(ウ) 現状調査及び成果検証のため、読書状況アンケートを5月と10月に実施する。

イ 昇降口の掲示板を利用した読書啓発

(ア) 掲示板に新着図書のポスター、今月の詩、各種お知らせ等を掲示する。

(イ) 出前図書館（生徒が興味を持ちそうな本をブックトラックに載せて展示）を実施し、その場で貸出をする。

ウ 図書委員会による読書活動

(ア) 読書週間のイベント→「本の木」「雑誌付録の抽選会」「しおりの作成」

(イ) 校内放送による「今月の一冊」→放送部に依頼してお薦め本の朗読をする。

◆ 今月の一冊（資料） ◆

放送部による今月の一冊→『桐島、部活やめるってよ』『図書委員から新着図書の紹介をします。今回紹介する本は、現役大学生朝井リョウ作『桐島、部活やめるってよ』という本です。高校生の桐島君は、バレー部のキャプテンで、ボールの出し手リベロをやっています。その桐島君がバレー部をやめるということになります。彼中心の部活だったが、彼が抜けたことによって、周りの人々がどう変わっていくかという本です。同じ高校生が主人公のこの本。どこか自分たちが感じるとうところがあります。一度読んでみてください。この本は3階の図書室にあります。』

（平成22年4月26日昼休みに放送）

(ウ) 絵本の読み聞かせ→7月に保育園で実施。教諭、司書、図書委員が4名参加。

エ 図書館入口の廊下掲示板を利用した読書啓発

- (ア) 本の空き箱にカラーコピーした表紙を貼り付けた新着案内
- (イ) 新着本のポスター、生徒のリクエスト結果表、読書啓発ポスターを掲示

オ テーマ別コーナーの設置

- (ア) 閲覧室入口横に、ヤングアダルト本コーナーを設置して展示する。
- (イ) 修学旅行向けのコーナー→沖縄修学旅行関連資料の展示。資料一覧の作成。

(2) 受験生のための大学受験資料コーナーの設置及び利用促進

- ア 目的 進路部と連携して、受験生に大学受験に必要な資料を提供する。
- イ 経緯 本校図書館には大学受験用の図書が少なく、特に小論文作成用図書が少ないので、進路部の教員と相談して受験資料をそろえたコーナーを設置することにした。
- ウ 資料収集
 - (ア) 進路部及び司書教諭を含む図書蔵書委員会と相談して購入。
 - (イ) 購入資料については他校の図書館だよりを参考に購入した。
- エ 広報 大学受験コーナーの資料を収集するとともにその資料を活用してもらうため、全校生徒・教職員・受験生への広報に努めた。
 - (ア) 進路についての広報を「広高図書館だより」に載せる。
 - (イ) 3年生向け小論文図書リストを「せんせいの図書館」(教員向けプリント)に載せる。
 - (ウ) 3年生向けプリント「広高図書館だより特別号」に大学受験資料記事を載せる。
- オ 貸出 大学受験に必要な本は、1ヶ月延長して貸出した。(受験資料の長期貸出)
- カ 資料リスト 大学受験資料コーナーの資料リストを作成し受験生に配布。
- キ 小論文対策に必要なテーマ別資料を大学受験資料コーナーに用意する。(国際理解・医療看護・保育・グローバル経済等の資料)

4 成果と課題

数値は、平成22年度図書館利用統計より(平成23年2月実施)。平成21年度にも実施している。

(1) 1、2年生読書状況の改善

ア 成果

- (ア) 1月現在、1年間に一度も学校図書館から本を借りたことがない生徒。
 - a 1年生は222/236人(94%)
 - b 2年生は、昨年度(1年次)が191/203人(94%)→今年度173/202人(85%)と減少した。
- (イ) 1月現在、貸出冊数は昨年度より、1年生34冊減、2年生111冊増、3年生は167冊増で、全体的に増加している。
- (ウ) 課題図書冊子や図書館だよりのプリント配布や「今月の一冊」(校内放送)により、生徒が図書館へ関心を持ち、1、2年の貸出利用者数の合計が21人(4月)からは33人(10月)に増加した。

イ 課題（数値は、生徒の読書状況アンケートより。平成22年5月実施）

- (ア) 読書が「好き」及び「どちらかといえば好き」を合計すると、1年・73%、2年・74%の生徒が、本を読むことが好きだと答えている。しかし利用する生徒は固定化しているので、新たな生徒の利用を増加させる工夫が必要。
- (イ) 図書委員会発行の会報など、図書委員が自主的に広報活動できるように司書、司書教諭が指導する。

(2) 受験生のための大学受験資料コーナーの設置及び利用促進

ア 成果

- (ア) 1月現在、1年間に一度も学校図書館から本を借りたことがない生徒。
3年生は、昨年度（2年次）が184/200人（92%）→今年度112/193人（58%）に減少した。
- (イ) 大学受験の本の貸出期間を1ヶ月延長したことにより本の貸出が増加した。
3類（受験資料）の3年生貸出は、10月が14冊、1月は1冊のみであった。
- (ウ) 小論文対策のためのテーマ別図書資料を10月に常備した結果、12月に関連する本13冊の貸出があった。

イ 課題

- (ア) 進路部や3学年担任の教員が受験生への進路指導の際、図書館の大学受験資料コーナーを利用するよう指導してもらう。
- (イ) 受験生のニーズに応えられるよう、進路に関する本の予算を確保する。
- (ウ) 3年生だけではなく、1、2年生向けの進学及び受験資料を紹介する。
- (エ) 受験生向け図書館独自のプリント「進路ナビ&しおり」（仮称）を作成する。

5 実践の考察と改善点

(1) 1、2年生読書状況の改善

ア 実践の考察

- (ア) 新着図書の紹介は、生徒・教職員に好評であり継続する要望が多かった。
- (イ) 読書週間のイベントは、内容を絞り生徒が準備できる期間が必要である。

イ 改善点

- (ア) 図書委員会（生徒）による協力が必要であり、司書に加えて司書教諭等が指導を支援する必要がある。
- (イ) 行事に関連する本やテーマ別コーナーは、学年のみならず教科とも相談して購入及び配本していくことも必要である。

(2) 受験生のための大学受験資料コーナーの設置及び利用促進

ア 実践の考察

- (ア) 少ない予算の中、厳選した受験資料を購入した。
- (イ) 10月に3年生向けの「広高図書館だより特別号」を配布後、大学受験資料コーナーを利用する生徒が増加した。

イ 改善点

- (ア) 大学受験に向けて図書館が果たす役割について、進路部及び3学年担任と十分協議し、受験生にとって最小限必要な図書及び資料を収集して、大学受験資料コーナーを充実させる。
- (イ) AO及び推薦入試における小論文対策の必要性の観点から、1、2年生の時から自ら情報を集め、取捨選択し、資料の読解力を育成する必要性がある。

6 実践から見えてくる、実践のための効果的なポイント

(1) 1、2年生読書状況の改善

- ア 図書館外の掲示板に生徒作品、新着案内、読書啓蒙のポスターを貼ることより入館しない生徒にも図書館に関する情報が入手できる。（情報の積極的発信）
- イ 他校の図書館や子どもの本屋さんに行き、展示グッズやアイデアを利用する。（アイデアの収集）
- ウ 他校の図書館だよりや選書ツールに目を通し、常に新しい情報に関心を持つ。（情報の収集）
- エ 絵本の読み聞かせや出前図書館、外部人材を活用した読書啓蒙のための講演など新しい活動に挑戦し、それを管理職や外部に報告していく姿勢が必要である。（新規事業への挑戦・試行）
- オ 生徒の読書状況アンケートは、生徒の読書傾向を知ることによって選書方針の改善等に繋がるので、継続することが大事である。（調査の継続性）

(2) 受験生のための大学受験資料コーナーの設置及び利用促進

- ア 大学受験資料コーナーの設置については、進路部教員とよく相談をし、本校に必要な図書及び資料を選定する。（情報の共有化）
- イ 資料は、他の進学校の資料を参考にして、3学年担任や受験生の要望を取り入れて収集する。（ニーズ）
- ウ 資料は、新しい出版年の資料を購入していく。（即時性）
- エ 進路部から、『蛍雪時代』など古い受験雑誌を寄贈してもらう。（経費節減）
- オ 受験生向けの広報紙を作成し、教職員及び1、2年生へも広報に努める。（PR）
- カ 小論文に関する資料や論文作成に必要な資料をそろえ、受験生の要望に応えるテーマ別資料コーナーを設置する。（集中化、分類を超えた横断的な配本）
- キ 志望理由書や面接などのために利用者が特定の期間に集中して利用する本については、貸出期間を短縮する。（効率的な利用）
- ク 受験日まで長期に借りたい本については、一か月を目安に長期貸出をする。但し受験終了後直ちに返却するように指導する。（貸出期間の特例）
- ケ 未返却図書の督促は、3学年担任と連絡を密にし受験情報を把握、適切な時期までに行う。（図書（情報財産）の保全）

◆◆ 資料 ◆◆

(3階図書館廊下の掲示板)



(図書委員による出前図書館)



(閲覧室にある大学受験資料コーナー)



(本の空き箱を利用した新着情報)



(葉っぱの紙に紹介したい本を書いて貼る)



(保育園での絵本の読み聞かせ)



◆◆ 2010 年度 広尾高校図書館読書推進 年間計画 ◆◆

	図 書 館 予 定	読書推進に向けて
月日	内 容	内 容
4 月	図書館運営方針、活動目標決定 今年度選書方針決定 図書館利用の手引き(教職員用)配布 蔵書選定委員会開催(毎月一回) 新任教職員の図書館ガイダンス 図書館利用の手引き(教職員用)配布	新入生に薦める本の展示 今月の一冊『桐島、部活やめるってよ』放送 「子ども読書の日」ポスター掲示 新入生オリエンテーション
5 月	第 1 回図書発注(1 月まで毎月発注) せんせいの図書館報 NO. 4 発行	第 1 回生徒の読書状況アンケート実施 広高図書館だより NO. 9 配布 沖縄修学旅行資料コーナーを設置 今月の一冊『神様のカルテ』を放送
6 月	都立中央図書館訪問(学校司書) 大学・専門学校個別ガイダンス(進路)	「広尾高校図書 4 7 冊」を、1、2 年生に配布 今月の一冊『リメイク・シックスティーン』 広高図書館だより NO. 10 配布
7 月	夏休み開館日計画 夏休み特別貸出 國學院大学図書館見学ツアー 推薦入試ガイダンス(進路部)	「夏休みのほん」全校配布 第一回ブックトークを聴く会実施 元中学校司書による語りを聴く会実施 高校生のための都立図書館探検ツアー参加 保育園に絵本の読み聞かせを実施
8 月		第二回ブックトークを聴く会実施
9 月	せんせいの図書館報 NO. 5 発行 センター入試説明会(進路部) 文化祭	広高図書館だより NO. 11 配布 今月の一冊『火群のごとく』を放送
10 月	読書週間(10/26～11/8) 高大連携(國學院大学生図書館見学) 一般入試ガイダンス	広高図書館だより NO. 12 配布 広高図書館だより特別号(3 年生)配布 今月の一冊『明日の空』を放送 大学受験資料コーナー設置 読書週間イベント「本の木」等を展示
11 月	次年度雑誌検討作業 多読英語の授業開始	第二回生徒の読書状況アンケート実施 第 4 回雑誌付録抽選会実施 今月の一冊『ニッポンの嵐』を放送
12 月	館内整理(大掃除・書架整理) 冬休み特別貸出	クリスマスツリーの飾り付けと本の展示 広高図書館だより NO. 13 配布
1 月	せんせいの図書館報 NO. 6 発行 3 年生最終督促 大学センター入試	広高図書館だより NO. 14 配布 今月の一冊『失恋延長戦』を放送
2 月	来年度「調べ学習きほんのき」検討 3 年生貸出中止 来年度「図書館利用の手引き」検討 来年度読書推進計画作成	広高図書館だより NO. 15 配布 今月の一冊『第二音楽室』を放送 出前図書館の実施
3 月	本年度収蔵図書統計 1 年間の統計資料整理 図書館利用案内作成(新年度用) 運営総括(案) 活動方針(案)作成	保育園に絵本の読み聞かせを実施 今月の一冊『チア男子』を放送

2 新聞を中心に読書活動の活性化に取り組んだ事例

〈都立石神井高等学校〉

パターン2:部活動等で多忙であり、本を手にとらない場合

1 読書状況の課題

石神井高校は部活動の大変盛んな高校である。また生徒が作り上げる学校行事は体育祭が大きなウェイトを占め、その準備にも多くの時間が割かれるという伝統をもつ学校である。そういう雰囲気を反映してか、組織的な読書活動は従来行われておらず、行事に読書週間も設定されていなかった。更に近年は重点支援校となるなど進学への取組も強化されており、生徒の多忙化には一層拍車がかかっている状況といえる。

図書館運営については、特に昨年度専任職員が全日制課程に不在になるなど（定時制課程勤務の司書がカバー）、読書活動を進める条件が不十分な状況もあった。

高校生時代は、一般的にゲームや携帯電話、更にインターネットの普及等に伴い、その影響を最も受け易い時代ともいえる。更に現場での実感として、最近の若者は価値観が多様化し、自分の嗜好も明確になる一方、他への興味が広がっていかない傾向が見受けられる（知的興味・関心の低下）。読書についても然りで、多読者でも、同じ傾向の本のみ読んでいるケースが多い。軽読書化もすすんでいる。

この2年程、新入生オリエンテーションで読書状況調査を実施したが、本を読む割合は「よく読む」「時々読む」を含めて49%から60%へと増加している。一方、「新聞を大体毎日読む」という生徒の割合は、10%（平成21年度）から7%（平成22年度）に、「時々読む」を加えた割合でも39%から37%に減少しており、特に新聞離れが顕著な実態が明らかになっている。

知的興味・関心の広がりというのは、本来学習における根底となるものであり、それが低下している現状は、学校教育の現場における大きな課題ではないだろうか。

2 課題解決のための方針と改善策

読書推進事業を計画するにあたり、図書館としても前述の問題意識を基本に考えた。時間に余裕のない生徒たちでも、新聞ならいろいろな読み方ができるし、知的関心を呼び起こす材料には事欠かない。新聞をもっと身近に置き、利用への動機付けを工夫して行い、少しでも新聞を読む習慣を身につけたいと考えた。この取組を中心に、他の図書館活動でも従来の枠を超えた取組を計画した。

◆◆ 活動方針 ◆◆

1. 「新聞をもっと身近に」という主旨で取組を行う。
新聞を使用した、生徒の読書意欲を喚起させる各種取組を行う。
2. 生徒実態に合わせた、各種読書啓蒙の取組を行う。
読書週間の設定。及びその中で、外部講師等の力を借りて読書行事を実施する。
図書委員会の活性化。
3. 「学習情報センター」としての活動機能の強化に向けた取組を行う。
教員向けに、教育活動における図書館の果たす役割について、及び「N I E教育」の意義や具体的手法例なども伝達する。

3 具体的な実践事例

司書教諭と学校司書（定時制勤務）でまず前年度末に話し合いをもって企画し、今年度学校司書が全日制勤務となったので以下の実践を連携協力して行った。通常の図書館活動以外の企画が多かったので、2人体制で何とか取組むことができた。

- (1) 図書館外「新聞閲覧コーナー」の設置と、全国紙3紙の配置。
- (2) 新聞切り抜きの校舎掲示板への掲示（時事問題解説中心、校内の時々課題にも連携「自転車事故防止キャンペーン」など）。
- (3) 新聞記事と関連本の同時展示による紹介。
- (4) P T A広報誌への寄稿（家庭での、新聞を通した親子コミュニケーションの呼びかけ）
タイトル「新聞をもっと身近に！」
- (5) 「『いっしょに読もう！新聞』コンクール」への応募呼びかけ。
- (6) 読書週間の設定
ア 教職員からの「生徒にすすめる図書」リスト作成・配布
イ L・H・Rを使つての読書行事
 - ・ 1年 紙芝居（学年全体）
 - ・ 2年 語り部の“語り”を聞く（各クラス毎。地域のボランティア団体に依頼）
 - ・ 3年 新聞記者の講演「いま、新聞とは」（学年全体）ウ 図書委員会企画「生徒の好きな本ランキング」展示
- (7) 文化祭への図書委員会参加「図書委員 この一冊ッ！」（大ポップ形式）展示
- (8) 「教職員用図書館利用案内」発行と、授業での図書館活用の呼びかけ。
- (9) 新聞記者による、教職員向けN I E（Newspaper In Education）研修（放課後、自由参加）
- (10) 授業支援のための、各種情報提供
- (11) 都立図書館との連携
図書委員を中心に一般生徒、及び新任教員も含めて見学実施（都立図書館でおりしも「新聞っておもしろい！」という企画展開催中）。

4 成果と課題

(1) 成果

まず、中心的課題の「新聞をもっと身近に！」については、以下のような数値結果が出た。3年生には1月、1年生には2月にそれぞれ「新聞についてのアンケート」を実施した結果である。「この1ヶ月間で新聞記事を読みましたか（テレビ欄だけの場合は除く）」という質問に対し、3年は48%の生徒が「はい」と答えた。1年は28%である。2年については実施時期が10月で、条件が違うが38%となっている。新聞閲覧コーナーは、3年の教室と同じフロアーにあり、一番利用しやすかった学年である。また、受験生という立場も相まって、新聞を読む割合が増えたと思われる。「現代社会」（3年必修）担当教員からも「授業での時事問題についての反応が良かった」という感想を聞くことができた。

図書館の年間貸出冊数も増加した。2,111冊（平成20年度）、2,333冊（平成21年度）、今年度は2月末現在で、3,563冊となっている。

図書委員会は、昨年までの数年間文化祭に参加してこなかったが、今年は参加することが出来た。また、読書週間でも学年毎の読書行事への協力を始め、独自なアンケート実施や結果報告など、可能な範囲での取組も行った。図書館への関わりが増えた分だけ生徒の意向が図書館運営に反映し、購入希望や貸出予約をする生徒も増え、貸出冊数の増加に繋がったのではないかと思う。

(2) 課題

生徒の新聞館外閲覧を保障するには、予算的な裏づけ、及び専任職員の多大な労力が必要というのが実施してみても課題である。学校予算が厳しい現状の中では、そこに財源を振り当てるためには、相当の校内的な理解が必要となるだろう。また、館外に新聞を配置する労力、その後のバックナンバー処理も、一定の時間を必要とする。通常の仕事もこなしながらなので、意義を明確に認識していなければできない仕事だということも実感した。

新聞を使った他の取組は、いくつか失敗したものもある。生徒の新聞に対する関心の低さは想像以上で、「いっしょに読もう！新聞」コンクールへの参加は、図書委員を中心に呼びかけたが結果として応募者がゼロであった。「新聞コラム読み比べ」として用意した館内のファイルも、労力のわりに閲覧が殆どなくて途中で中止した。

また、図書館の貸出冊数が増えたとはいえ、その中味については従来と変わらず文学が大半であり、1年（新聞配置は実質半年）程度の取組では効果は見えない。この点に関してのより効果的な策は、教科との連携だと痛感した。日頃図書館に足を運ばない生徒にも図書館という場所、機能を体験してもらうこと、さまざまな資料を使う経験をしてもらうことの重要性を、数少ない図書館での授業で再確認した。PISA型学力に注目が集まり、新学習指導要領でも、言語力育成が一つの大きな柱とされている。知識伝達型教育から生徒の自立的学習能力育成のための教育実現のために、図書館の重要性は増している。

5 実践の考察と改善策

今回の読書活動推進モデル校事業は、1年という期間で行ったものであるが、読書というもの性格上この短い期間（正味はもっと短い）で結果を出すのは大変困難だと思う。生徒たちの現状を分析し、必要と考える教育活動を実践するには、その現場で可能と思う取組を計画してはいても、多くの事前の準備が必要である。都立高校の図書館職員制度は、この10年来

安定していない。本校でも前記のように専任職員が不在の1年をはさんで新たに配置された中で取組を行ったわけだが、専任職員である学校司書でさえ、その準備が周到に行えなかった感がある。校内的にその位置が確立していないからである。司書教諭が各部署との連絡調整に重点的にあたり、結果として支障はなかったものの、学校司書としては学校の状況を十全に把握できていない中で、手さぐりで取組を行った感がある。読書活動の推進のためには、何よりその中心となる図書館専任職員が十分活動できる環境、体勢を保障することが必要と思う。

ただモデル事業を実施してみて、意識的に活動を計画することでの日頃の図書館活動の見直しも一定できたと思う。地域の読書ボランティアの方々との連携や、都のNIE事務局との連絡で、今まででもやれることはたくさんあったのだということがわかった。この経験を広げること、学校図書館活動、読書推進活動がより豊かに広がりをもったものになることを期待したいと思う。

本校では、予算の許す範囲、労力もかけないように、規模を縮小して新聞の館外閲覧は続けていければと考えている。新学習指導要領で新聞を用いた授業が奨励されていることもあり、本校でも若手教職員を中心にNIEに関心が出てきている。この1年実践を行ったことでその芽も出てきたと思うので、そこをポイントとして図書館でも可能な情報提供や連携をしていきたいと考えている。

6 実践から見えてくる、実践のための効果的なポイント

(1) 学校全体での問題意識の共有と、活動への理解・協力が不可欠

特に管理職が学校運営計画策定の際、活動の意義を明確にし位置づける。予算等にも配慮し、必要な財源を確保する。

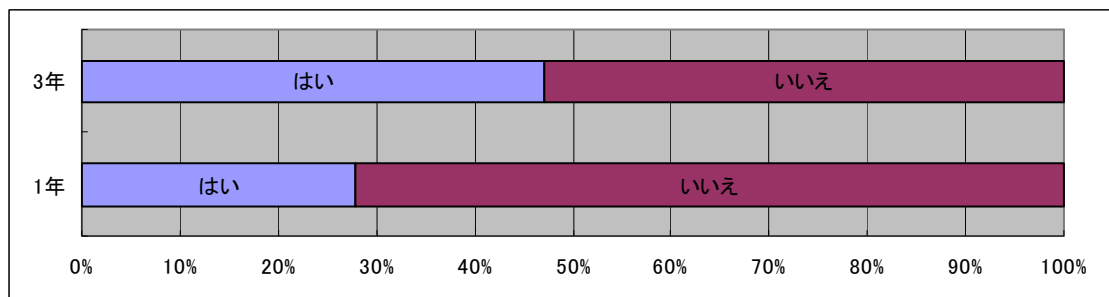
(2) 活動のための年間計画の早期策定、組織体制作り

活動の中核となる図書館専任職員（学校司書）と係教諭（充て司書教諭）が、十分な話し合いをして基本的な計画策定を行う。その上で、計画実現のための必要な準備を手分けして行うとスムーズな活動を行うことができる。例えば、図書委員会指導においても、館内に常駐が原則の学校司書と、授業時間以外には比較的自由に動ける司書教諭とがそこを踏まえて役割分担すると、生徒の活動もスムーズに進む。

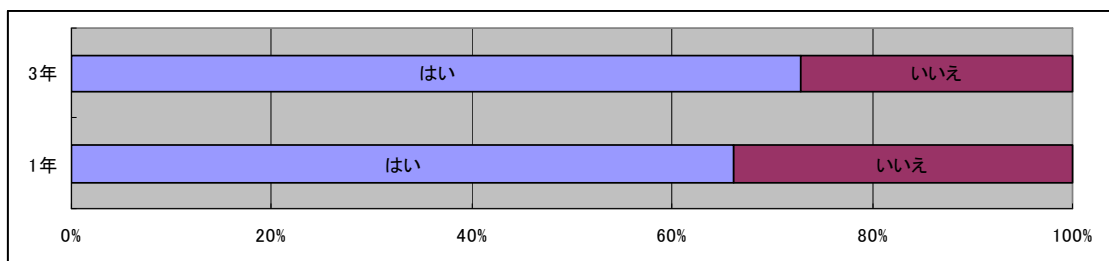
◆◆ 資料 ◆◆

新聞についてのアンケート (平成 23 年 1～2 月実施)

◆ この 1 ヶ月間で新聞記事を読みましたか (テレビ欄だけの場合は入りません)。



◆ 家で新聞を読むことができますか。



◆ 以下の質問は新聞を読まない人が答えてください。

あなたが新聞を読まないのは何故ですか(複数回答OKです)。

	3 年	1 年
① 読む必要性を感じない	20%	22%
② 内容に興味がない	23	40
③ 読み方がわからない	5	3
④ 漢字や文字が多くて読みづらい	13	22
⑤ 手元に新聞がない	17	20
⑥ その他	17	9
「その他」の記入例：時間がない／インターネットで見る		

※ この表の数値は、回答者全体の中での割合

◆ 「生物多様性」をテーマとして新聞切り抜きを中心とした館外掲示



◆◆ 平成 22 年度 図書館年間活動計画 ◆◆

	全 体	モ デ ル 事 業	選書発注
4 月	貸出準備(利用者データ更新)	図書館掲示コーナー確保	自校 1 回目
	図書館運営組織確認	新聞関係記事感慨掲示	
	年間活動計画・予算執行計画確定	館内新聞閲覧コーナー設置	
	「学校要覧」「ホームページ」図書館部分改訂	新聞コラム読み比べファイル設置	
	「教職員利用案内」発行		
	新入生オリエンテーション実施(資料作成)		
	「新着案内」発行・返却督促		
5 月	教職員購入希望用紙配布	PTA 広報誌への原稿寄稿依頼	センター 第 1 回
	「新着案内」発行・返却督促	新聞関係記事館内外掲示	
6 月	「新着案内」発行・返却督促	新聞 3 紙購入と館外配置	センター 第 2 回
		上記の館外配置スタート	
		新聞関係記事館内外掲示	
7 月	「夏休み用推薦図書リスト」作成・配付	新聞関係記事館内外掲示	センター 第 3 回
	上記以外の館内別置	「いっしょに読もう!新聞」コンクール応募	
	書架整理(図書委員会協力)		
	夏季休業中の開館		
	「新着案内」発行・返却督促		
8 月	夏季休業中の開館	新聞関係記事館内外掲示	センター 第 4 回
9 月	文化祭参加	新聞関係記事館内外掲示	センター 第 5 回
	「新着案内」発行、返却催促		
10 月	「読書週間」実施	NIE 事業講師による教職員研修	センター 第 6 回
	教職員「石神井高校生への〇〇冊」発行	新聞関係記事館内外掲示	
	L・H・R を使用しての学年毎読書行事実施		
	「新着案内」発行、返却催促		
11 月	「新着案内」発行、返却催促	新聞関係記事館内外掲示	センター 第 7 回
12 月	次年度予算(案)作成	新聞関係記事館内外掲示	センター 第 8 回
	「新着案内」発行、返却催促		
	蔵書点検(図書委員協力)		
1 月	「雑誌希望アンケート」実施、次年度確定	新聞関係記事館内外掲示	センター 第 9 回
	「新着案内」発行、返却催促		
2 月	3 年生最終返却督促・中間利用状況報告	新聞関係記事館内外掲示	自校 2 回目
	「新着案内」発行		
3 月	「新着案内」発行、返却催促	新聞関係記事館内外掲示	

	除籍・利用統計まとめ	新聞関係記事館内外掲示	
	蔵書の現状まとめ・活動総括	新聞関係記事館内外掲示	

◆◆ 平成 22 年度 図書委員会年間活動計画 ◆◆

	カウンター	全 体	編集班	広報班	整理班	調査班
	学校司書	司書教諭・学校司書	司書教諭	司書教諭	学校司書	学校司書
4 月	3 年中心	一斉委員会			「本の装備」「データ入力手伝い（バーコード貼り）」「新聞記事紹介」等希望の作業を実施。仕事を都合のつく時間帯で行う。	新入生アンケートまとめ
		係分担・カウンター当番決定				
5 月	3 年中心					購入希望図書アンケート
6 月	3 年中心	「文化祭」「読書週間」内容検討・決定				マンガ・DVDアンケート + 購入希望
7 月	3 年中心	書架整理				
8 月		「文化祭」「読書週間」準備				
9 月	2 年中心	文化祭				
10 月	2 年中心	読書週間				購入希望マンガアンケート
11 月	2 年中心					
12 月	2 年中心					
1 月	1 年中心					次年度雑誌アンケート
2 月	1 年中心					
3 月	1 年中心	活動総括	「Our Library」発行			

(参考) H21 広報班 館外ウィンドウ展示(毎月・月当番で)

3 図書館運営委員会等の学校組織を中心に読書活動を活性化した事例

〈都立東久留米総合高等学校〉

パターン2:部活動等で多忙であり、本を手にとらない場合

1 生徒が本を読まない理由

(1) 新一年生読書アンケート

(総数：239人)：4月実施

読書について		一ヶ月間に読んだ冊数		情報や知識を入手する時、最も利用するメディア	
好き	67人 (28%)	0冊	111人 (46%)	新聞	6人 (3%)
どちらかといえば好き	118人 (49%)	1冊	55人 (23%)	本	6人 (3%)
どちらかといえば嫌い	41人 (17%)	2冊	38人 (16%)	雑誌	8人 (3%)
嫌い	13人 (5%)	3冊	16人 (7%)	テレビ	146人 (61%)
		4冊	5人 (2%)	インターネット	40人 (17%)
		5冊以上	8人 (3%)	携帯電話	29人 (12%)

1ヶ月間の延べ読書冊数 294冊：一人当たり1.2冊

◆◆ データの分析、及び課題 ◆◆

- ① 新一年生は、本や読書について、好ましく思っている生徒が77%となり、本そのものに抵抗感を持っている生徒は少ない。
- ② しかし、現実には一月に1冊も読まなかった生徒が46%と半数近くをしめた。意欲はあるが、多忙、又は他のことに時間をとられ、本を読んでいないと、考えられる。
- ③ また最もよく使う情報源として、活字メディアをあげる生徒が全体の9%と少なく、様々な情報源になることや調べ学習のツールとして便利であることも浸透していない。

2 課題解決のための方針・改善策

- (1) 読書について、習慣化されていないと考えられるため、習慣づけるような取組を行う。
- (2) 本校は授業の課題も多く、積極的な読書推進活動を行う必要がある。またクラブ活動なども盛んであり多忙なため、積極的な読書推進活動を行わなければ未読率を下げることは困難である。読書について抵抗感は少なく、積極的なアプローチも可能である。
- (3) 趣味・娯楽としての読書だけではなく、知識や情報を得る読書活動の体験、また読書に関する様々な知識や体験を深めることが必要である。

3 具体的な取組

(1) 「ほんとも」プロジェクト——学年団との連携

ア 毎月、一冊、本を読み、簡単な紹介文（書店のPOP的なものでも可）を書く、という取組を行った。1学年は毎月、決められたテーマから、2学年は決められた著作者の中から自分で選び本を読む。読書感想文では、「読む」と同時に「書く（表現する）」ことが重要になるが、このプロジェクトでは、「読む」という行為に焦点をおき、①気軽に本を読んでみよう②毎月、一冊以上読むという習慣をつけよう③それを仲間や同級生に伝えよう、ということを主眼にした。紹介文については教科の評価の対象にはしないが、運営委員会のメンバーでしっかり確認し、よく書けたものは、コピーして図書館の前に掲示した。自分の友人が、どんな本を読み、どんな紹介文を書いているのか、生徒たちも、よく見ている様子である。紹介文の回収や未提出者への働きかけなどを各学年、担任団の協力をあおいだ。

◆◆生徒が書いた紹介文◆◆



◆◆廊下に展示されて紹介文を見る生徒たち◆◆



イ 読書エッセイコンクールの実施

『新潮文庫の100冊』、『きみに読んでほしい50冊』の中より1冊以上読み、読書エッセイを書くことを図書館運営委員会として夏の課題とした。校内コンクールの実施とともに、全作品、新潮社『感動大賞』コンクールに応募した。毎月の紹介文の作成の延長で、本を読み、思い出したこと、感じたこと、考えたことなどを、自分の言葉でエッセイにした。「感動大賞」では賞はとれなかったが、7520通の応募作品の中から72名の第一選考通過者に2名選ばれた。

(2) 夏の課題図書—国語科との連携

教職員による推薦図書リスト『Anytime Anywhere Any book』を作成。その中から、新書を一冊以上読み、感想文を書くという課題を国語科が設定した。

(3) 講演会—授業や学校行事との連携

ア 奉仕の授業として、都立多摩図書館に協力していただき6月24日（木）「読み聞かせ」について講演と体験活動会を行った。生徒の反応も良く、その後、夏休みに保育園などで奉仕活動を行う生徒などから自分も読み聞かせをしてみたいという感想もあった。

◆◆ 読み聞かせについての講演と体験活動 ◆◆



イ 読書講演会を10月19日（火）に行った。テーマは「言葉の力」。講演者は氏原基余司氏（文化庁国語調査官）。講演の後に懇談会を行った。言葉を豊かにすることは、生活全体に関わること、とくにスポーツにおいてプレーの意図や反省点などを言葉にすることの重要性など生徒の興味に即した講演をしていただいた。また言葉を豊かにするうえでの読書の重要性も話された。懇談会では生徒や保護者も参加し、言葉について、また読書について和やかな雰囲気の中で懇談することができた。

◆◆ 生徒・保護者も参加した懇談会 ◆◆



4 成果と課題

1 学年をサンプル例として

(1) 第2回1年生読書アンケート（総数：234人）：2月実施
（カッコ内は前年4月実施アンケートとの比較）

読書について		一ヶ月間に読んだ冊数		情報や知識を入手する時、最も利用するメディア	
好き	65人 (-2)	0冊	95人 (-16)	新聞	2人 (-4)
どちらかといえば好き	93人 (-25)	1冊	71人 (+16)	本	5人 (-1)
どちらかといえば嫌い	55人 (+14)	2冊	35人 (-3)	雑誌	2人 (-6)
嫌い	21人 (+8)	3冊	23人 (+7)	テレビ	139人 (-7)
		4冊	4人 (-1)	インターネット	40人 (0)
		5冊以上	14人 (+6)	携帯電話	46人 (+17)

1ヶ月間の延べ読書冊数 323冊 (+29冊)：一人当たり平均 1.4 (+0.2)

(2) 図書館貸出統計による読書活動の検証

ア 未貸出率

	2009年度	2010年度	比較
全学年	82.20%	59.20%	-23.00%
1学年	65.70%	36.00%	-29.70%

◆ 貸出を利用しなかった生徒の割合が、取組以前と以後で、全体で23ポイント、1学年は29.7ポイント減少した。

イ 学年別貸出冊数

	2009年度	2010年度	比較
全学年	1867	1890	+23
1学年	500	577	+77
2学年	607	570	-37

◆ 貸出冊数が取組以前と以後で2学年は1学年時と比較して70冊増加した。(1.15倍) 1学年は前年度の1学年(現2学年)と比較して77冊増加した(1.22倍)

*各年度4月1日～12月31日までの統計

【実践の考察】

1学年では1ヶ月の延べ読書冊数は、1ヶ月あたり29冊増加した。これは「ほんとも」プロジェクトの成果だと考えられる。半面、読書について、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた生徒の数が27名マイナスとなり反対に「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と答えた生徒が22名増えてしまった。部活や勉学に多忙、また求められる読書のレベルが上がっている中で「読まされている」感覚があるのかもしれない。

どのようにして読書習慣を身につけさせ、読書の楽しさを伝えるのか、効果的な生徒への働きかけを考える必要がある。

また4月当初に比べ、後半は、提出率が悪くなった。評価には直結しない、このような活動をどのように魅力的に継続していくのか、より工夫が必要である。

アンケートの中で、1年間の「ほんとも」活動について振り返り、感想を書いていた。代表的なものを紹介したい。

- ・ 「ほんとも」がなきゃ読まないだろうという本をたくさん読んだ
- ・ ジャンルを学校側で決めないでもらいたい。いつも自由がよい
- ・ 読んで得た知識を、自分の言葉にして紹介する大変さ

5 取組のポイント

具体的な取組については、図書館運営委員会（司書教諭と学校司書、国語科と1学年、副校長がメンバー）を中心に組織的な運営を行った。図書館としての視点、教科としての視点、担任としての視点と様々な立場から意見やアイデアを出し運営ができた。本校は全日制・定時制課程併置校であり、学校司書は定時制の時間帯の勤務であるが、そのような枠を超えて本の専門家としての意見やアイデアを提案した。また実際に生徒からのレファレンスや要望、意見を受け選書やフロアワークを行った。司書教諭はモデル校事業全体のまとめや校内の連絡などを行い、またフロアワークを行いながら生徒から相談を受け指導やサポートを行った。

特に重要なポイントについて以下にまとめる。

(1) 人的環境面

組織的な運営、特に中心となる司書教諭と学校司書の協力と担任団との連携が重要である。具体的なポイントとして

- ①担任による生徒全体への直接の指導や働きかけ
- ②司書教諭、学校司書、運営委員たちによる生徒の紹介カードにコメントを記入するなど個別の励まし、働きかけ

など多面的なアプローチで連携することが重要である。特に運営委員会と担任団との意思疎通は不可欠である。

(2) 施設・環境面

予算の充実。資料費とともに展示やPRのための一般需用費も必要。

(3) 学校運営面

図書館だけではなく、学校全体で取組む姿勢が重要。単なるトップダウンの取組ではなく、運営委員会を中心に職員間の意見をまとめることが重要である。読書活動のプロパーとして司書教諭、学校司書が核となり学校全体を有機的に結び付けることが大切である。そのためには司書教諭の読書活動のための時間数を確保することが望まれる。また1校1名の学校司書の人的配置も必要である。

また、本校では副校長が運営委員のメンバーであること。また校長より様々な場面で支援が受けられたことが大きな力となった。

4 司書教諭と学校司書の連携を円滑にし「本を使う」授業を展開した事例

〈都立鷺宮高等学校〉

パターン2 部活動等多忙であり、本を手にとらない場合

パターン3 読書経験があまりなく、本そのものに抵抗がある場合

1 読書状況の課題

本校生徒の読書状況に関しては、あまり芳しくない状況にある。小学校、中学校、高等学校と進学するにつれて、行動範囲や交際範囲が広がるため（放課後の使い方が変化するため）、それにとられる時間が増加し相対的に読書時間が減る傾向にあるのではないかと考えられる。そのため本校の図書の貸出冊数も概ね1,700冊前後を推移している。これは全校生徒数で割ると一人あたり年間2冊前後の貸出数ということで、非常に寂しい状況となっている。しかし、調査等で読書が「嫌い」と答える生徒は全体でも1割以下にとどまっており、全般的には「読書」への漠然とした欲望を持つ生徒は一定数いるようである。そのため読書機会、読書時間を意図的に学校側が用意することによって、生徒と「本」の距離を近づけることは可能なのではないだろうか。授業や校外学習、各種イベントを通じた、生徒と「本」「読書」との距離を近づける取組を、1年間継続的に行う必要性を感じ実践を行った。

2 課題解決のための方針と改善策

高校生の「読書」を「本を読むこと（作品を読む）」と捉えるのか「本を使うこと（資料を利用する）」と定義するのかで、課題解決に向けた取組内容は変化する。高校生に関しては、卒業後の社会生活のことも考えると、「楽しみ」「趣味」的な「読書」の奨励だけではなく、「本を使う」という「読書」の必要性・重要性を伝えていく必要がある。学習活動が一生継続する「生涯学習型社会」においては、学校教育においても生徒たちの将来を見据え「本を使う」方法を教えていかななくてはならない。学校図書館の継続的な利用者が全校生徒の4割弱、公共図書館の利用者が1割を切るという本校の現状の中で「読む読書」から「使う読書」へと「読書」の質を変化させるためには、積極的に図書館を利用していく態度を養っていくことが必要である。そのことを念頭において、図書館を使う、図書館に足を運ぶ、そして何よりも図書館に親しむことを目的とした実践を軸に据え、様々な課題を解決していくこととした。

3 具体的な実践事例

(1) 「読書」や「本」に親しむ取組

ア 読み聞かせ活動（司書教諭が指導を担当）

(ア) 書店店頭での読み聞かせ

夏休みを利用し、取次の協力の下、2店舗で読み聞かせを実施。

(イ) 学校行事における読み聞かせ

校内でのもちつき大会に参加した幼稚園児への読み聞かせを実施。



(2) 図書委員会活動（学校司書が指導を担当）

ア 日常活動

図書館内の整備活動、カウンター当番など。

イ 文化祭への参加

古本市の実施、資源の再利用というテーマを掲げ古本を校内より集める。

(3) 読書講演会の実施（東日本大震災により中止）

民話語り部、新聞社文化事業部、国際子ども図書館司書、雑誌編集者、出版取次社員を迎えて、1年生を対象にした選択形式の講演会を企画。

(4) 教科や授業と連携した取組

ア 長期休業中を利用した課題の設定

(ア) 学校司書によるブックリストの作成

「大人になるための1冊」と題し、新書等の「知る」「学ぶ」ためのブックリストを作成し全校に配布。

(イ) 国語科と連携した課題の設定

アに示したブックリストを活用し、長期休業中に新書等を読み、キャッチコピー並びに（感想文ではなく）意見文を作成する課題を設定。

イ 3年生総合的な学習の時間「表現法研究」での取組

(ア) 東京都立中央図書館での学習活動

長期休業中を利用し、都立中央図書館を訪問。図書館見学だけではなく、卒業後の生涯学習を視野に入れた実践的な資料・情報収集のスキルについて学習する。また、各自が設定した卒業レポートのテーマに基づいたブックリストの作成を行う。



(イ) 卒業レポートの作成

卒業に向けて、各自の進路に関連したテーマを設定し、A4、10枚程度の卒業レポ

ートを作成する。レポート作成に当たっては、様々なメディア・資料を横断的に利用することを必須とし、図書資料、インターネット等、複数の資料を使うことを心がけた。また、資料探索については、受講者全員が一度は公共図書館に足を運び、そこで図書館司書の力も借りながら資料を探すことも必須の課題とした。

(3) 国語総合における読解力向上に向けた授業プログラムの作成・実践

ア 授業の目的

2000 年から行われている OECD による PISA 調査で、日本の子どもたちの大幅な「読解力」の低下が指摘されて以降、「読解力」の向上が学校現場での大きな課題となっている。ここで言う「読解力」とは単に本を読むリテラシーではなく、「効果的に市民社会に参画していくために必要な、テキストを理解・利用・熟考する能力」というものである。この「読解力」を、どのように育むかを考えた時に、クローズアップされるのが学校図書館という存在である。学校図書館にある資料を活用することで、市民社会に参画するために必要な「自らの意見」を形成していく方法を学習することが可能となるのではないか。そのようなことを考え新たな授業プログラムを開発し実践することとした。自らで選んだ新聞記事とワークシートを教材とし、学校及び公共図書館をも活用しながら、記事内容をより深く読解し、記事に対して自分なりの意見を持つことを目標として授業を行った。

イ 事前の準備

- (ア) 授業は全てワークシートを使って行うため、ワークシートを用意する。
- (イ) ワークシートをしまうためのクリアフォルダーを人数分用意する。
- (ウ) 新聞を購読していない生徒用（全体の 3 割程度）に予備の新聞を用意する。
- (エ) 授業内容について、学校司書との事前打合せ。

ウ 各時間ごとの流れ（2 時間目以降は全て学校図書館で実施。）

- (ア) 文章作成の基本的な技術を学ぶ。【1 時間目】
- (イ) 新聞記事を用意し、興味のあるものを選び要約する。【2 時間目】
- (ウ) 図書館の使い方を学ぶ。【3 時間目】
(学校図書館オリエンテーションを通じて、図書館の仕組みを学ぶ。)
- (エ) 新聞記事をより理解するための参考文献を 2 冊用意する。【4 時間目】
(学校図書館、公共図書館【事前に準備】それぞれから 1 冊ずつ用意する。)
- (オ) 参考文献を読み込み、内容を評価する。【自宅学習・5 時間目】
- (カ) 新聞記事に対する意見文を作成する。【6・7 時間目】
(800 字程度、記事の要約、参考文献からの引用を必ず行う。)
- (キ) 他者の作成した意見文を読み相互評価を行う。【8 時間目】

エ 司書教諭と学校司書の連携

授業をより円滑に進めていくため以下のように役割を分担した。事前に両者で打ち合わせを行うことによって、より効果的に授業を実施することができる。

(ア) 司書教諭

授業に関する全体の進行。新聞記事の選定、意見文の作成などを指導する。図書館

オリエンテーションの実施。

(イ) 学校司書

新聞記事の選定状況等を見ながら資料を準備する。参考文献選定に当たってのレファレンス、生徒への指導・助言の実施。授業時間外の学習への対応。



4 成果と課題

「読書」という行為は個人的な営みであり、その目的も内容も一人ひとり大きく違う。そのため生徒を「読書」という行為に向かわせるための取組も、様々なものが想定される。しかし、人生をより豊かにする行為が「読書」であると考えるならば、「楽しみのための読書」も「知るための読書」も共に、人の一生にとって欠かせない行為である。しかし、現在の高校生を取り巻く環境には、「読書」以上に「楽しい」ことが多くあり、「読書」という行為に生徒たちがなかなか向かおうとしない現実がある。そのような状況の中で、今回の取組は、「本」から離れたところにいる生徒たちを「読書」に向かわせると共に、その読書を更に「楽しみ」から「知的好奇心の充足」へと向かわせようと意図したものである。今年度については以下のようなデータがある。

(1) 図書館貸出冊数に見られる変化

近年、本校図書館においては順調な貸出冊数の増加が見られていた。しかし今年度は年度当初より昨年度と比較し貸出冊数が少なく、原因等も見つけることができずその対応に苦慮していた。しかしながら、授業と連携して学校図書館を効果的に使用する取組を行うことによって、取組を行った学年に関しては改善が見られた。また、授業で使用した3類(社会科学)資料を中心とした9類(文学)以外の貸出も大幅な増加が見られた。文学を「楽しむ」生徒が減ってしまっている状況は大変に残念ではあるが、今回の取組によって生徒が「使う読書」を行ったことが見えてくる。

ア 1学期における全体の貸出冊数が昨年度に比して減じている状況。

H20年度(582冊)⇒H21年度(784冊)⇒H22年度(598冊)

イ 2学期における全体の貸出冊数が1学期よりも改善されている状況。

H20年度(698冊)⇒H21年度(709冊)⇒H22年度(745冊)

ウ 11月(授業実践月)における1年生の貸出冊数

H20年度(76冊)⇒H21年度(47冊)⇒H22年度(192冊)

エ 11月における3類(社会科学)資料の貸出冊数

H20年度(49冊)⇒H21年度(20冊)⇒H22年度(122冊)

オ 11月における9類（文学）以外の貸出冊数

H20年度（102冊）⇒H21年度（58冊）⇒H22年度（220冊）

(2) 学校運営連絡協議会による調査に見られる変化

例年、生徒・保護者・教職員対象に学校生活に関するアンケート調査が行われている。その中で生徒対象の学校図書館に関する設問（「図書館をよく利用している」）に関して、過去3年間は30%前後で推移していた肯定的意見（そう思う・ややそう思う）の割合が約60%となり、過去4年間で初めて否定的意見（あまりそう思わない・そう思わない）を上回るという大きな変化をもたらした。

5 実践の考察

「読書」活動を推進していくに当たっては、まずは推進者自身が「読書」という行為に対して固定的な考え方を持たないよう留意すべきであろう。1冊の本をじっくりと味わうことも、数冊の本を横断的に利用することも「読書」に変わりはない。様々な形の「読書」を想定しながら実践を行っていくべきである。その意味において、子どもたちに向けて絵本を読んで聞かせる行為は「楽しむ読書」の裾野を確実に広げていくであろうし、自らの成長のために用意した参考文献を「使う」「読書」の体験は今後の生涯学習の場面で確実に自身を助けてくれることになる。個人的な営みである「読書」という行為を生徒たちに広めていくためには、今まで以上に個人の成長に合わせたバリエーション豊かな取組が必要になるだろう。

6 実践から見えてくる、実践のための効果的なポイント

今回のような年間を通じた読書活動を行うためには、まずは担当者が単独で実践を行うのではなく、管理職も含めた校内全体のバックアップ体制と、年間の教育活動への位置付けが必要である。そのような体制が組めないと、実践は単年度だけの単発のものに終わってしまうと共に、担当者ごとにと取組にばらつきが出てしまう危険性がある。まずは学校全体の取組としていくことが肝要である。

それと同時に学校図書館の充実も重要である。特に十分な人的配置が大事である。今回の実践でも専任の学校司書が果たした役割は大変に大きい。資料の準備、館内の整備、授業への参加など、学校司書がいることによって初めて本と生徒が結びつき、効果的な授業が行えることを実感した。学校図書館は校内の様々な本を貸し借りするだけの場所ではなく、校内の他の教室と同様に教育活動を行う場所である。学校図書館には教育的な役割を担った学校司書の存在が必要不可欠であり、学校司書と司書教諭が連携することによってより効果的な読書推進活動が行えるものと確信している。

◆◆ 年間読書活動計画 ◆◆

※（ ）内は担当者、司教＝司書教諭、学司＝学校司書

【1 学期】

- ・学校経営計画に学校図書館に関する取組と年間授業回数を目標として明記。（司教）
- ・システム導入を開始。導入記録を作成。（学司）
- ・公共図書館、団体貸出サービスへの登録、授業での利用開始。（学司）
- ・学校図書館オリエンテーションの実施（司教・学司）
- ・総合的な学習の時間での学校図書館の活用。（司教・学司・各教科担当）
- ・夏休み向けブックリスト「大人になるための1冊」を作成し全校配布。（学司）
- ・新書を中心に3年生小論文対策を視野に入れたブックリストを作成。（学司）
- ・1年生向け夏休み課題の設定。各種文庫の「夏の100冊」等から本を選び、キャッチコピー作成・意見記述。（司教・国語科）

【長期休業中】

- ・3年総合的な学習の時間「表現法研究」受講者による都立図書館での学習。8月後半に30名の生徒で都立図書館に行き資料探索実習と館内見学を行う。（司教・国語科）
- ・書店店頭での「読み聞かせ会」実施。日販との連携事業として7月に校内実習（予行演習）を行い、8月に川崎、小金井で2回実施。3年自選「保育」選択者、図書委員有志、1年生希望者、約25名が参加。（司教・家庭科）

【2 学期】

- ・図書委員会による文化祭古本市実施。（司教・学司）
- ・「読解力向上」に向けた1年生対象の国語総合授業プログラムの実施。（司教・学司）
- ・「表現法研究」卒業レポートの作成。夏休みの都立図書館実習をもとに、文献を集めレポートを作成。学校図書館のみならず公共図書館の利用を課題とする。（司教・学司）
- ・12月にある「校内もちつき大会」に幼稚園児を招待し読み聞かせを実施。夏休みに読み聞かせを行った生徒を主力に実施。（家庭科・司教）

【3 学期】 （3月に改築に伴う仮設校舎への引越しあり。）

- ・読書講演会の実施（司教・1学年）
3月14日に講師を5名を招き、1年生対象に選択制の講演会を2時間程度実施。キャリア教育の要素も取り込む。以下の演題で5講座を用意。【東日本大震災により中止】
「民話の世界へようこそ」（民話語り部さんに依頼）
「本にまつわるお話～出版業界ってどんなところ？」（日本出版販売より社員派遣）
「国会図書館ってどんなところ？」（国立国会図書館より職員派遣）
「毎日が文化祭～新聞社の文化事業と本」（朝日新聞社文化事業部より社員派遣）
「雑誌ってどうやってできるのだろう？」（音楽雑誌編集プロダクションより社員派遣）

5 学校組織を活性化し全教科で読書活動を取り入れた事例

〈都立美原高等学校〉

パターン3：読書経験があまりなく、本そのものに抵抗がある場合

1 読書状況の課題

本校は平成 17 年度に開校した創立 6 年目（18 クラス）の単位制高校である。本校の読書状況を貸出統計からみれば、開校以来伸びてきている（4※表参照）が、利用者が固定化しており図書館を利用しない生徒が圧倒的に多い、という課題を抱えている。

本校の生徒が本を読まない要因を次のように考える。

(1) 個人的要因

本の世界の楽しさに出会っていない。

(2) 社会的要因

本以外に手早く情報を得るツールが身近にたくさんある。現代のスピーディーで刺激적인環境は読書をするには適さない。

(3) 物理的要因

1 年次生にとって図書館は上級学年が使うフロアにあるので行きにくい場所である。また本を読まない多くの生徒にとって図書館は用事もないのにわざわざ行かない場所である。

2 課題解決のための方針と改善策

本校は取組に先立ち「モデル事業推進委員会」を編成した。構成メンバーは副校長（委員長）司書教諭、学年（各 1）、庶務、図書を担当する係り教諭、学校司書の 8 名である。

年度当初に全校生徒対象の読書意識調査を実施した。〈回答数 668 2010.4〉

調査結果から把握した生徒の読書意識は以下のとおりである。

- (1) 本はあまり読まない。（全体の 58% が 1 ヶ月間に本を読んでいない。）
- (2) 図書館で借りない。（全体の 69% が読書のために学校図書館を利用していない。）
- (3) しかし本を読むのは好きである。（全体の 73% = 好き 29% + どちらかといえば好き 44%）
- (4) 本を読めば楽しい（全体の 93%）し、役に立つ（全体の 64%）のもわかっている。本を読んだ方がいい（全体の 81%）とも思っている。
- (5) 生徒（全体）が読みたい本、ベスト 10 はこんな本である。

1 位	ドラマ・映画の原作	2 位	楽しい小説	3 位	泣ける小説
4 位	ファンタジー	5 位	ベストセラー	6 位	ファッションやメイク
7 位	TV や芸能人がすすめた本	8 位	高校生が主人公の小説		
9 位	ミステリー小説	10 位	ホラー小説		

上記のことから本校の生徒は読書の有意義性を認識していること、読みたいと欲する本なら読む意欲があることが分かった。その上で本校の課題である、利用者が固定化しており図書館を利用しない生徒が圧倒的に多い、を解決するために次のような方針と改善策を立てた。

方 針：本の面白さを生徒に伝え、読書意欲を喚起させる
次年度以降に繋げるために1年次生に取組の重点を置く

改 善 策：(1) 楽しい読書のアピール
(2) 教室に図書館の情報を
(3) “何かやっている図書館”の演出

3 具体的な実践事例

図書委員会活動は主に司書教諭、図書を担当する係り教諭が担当し、図書館全般を運営する学校司書と協働することで、取組の推進力が生じる効果があると考える。

(1) 普段来ない生徒を来館させるための教科との連携

ねらい：教科と連携し図書館を使った授業を展開することで多くの生徒に来館する機会を与える。それと同時に館内には、読書意識調査で得た“読みたい本ベスト10”で挙げた本を特別展示しておき、普段来ない生徒に自然な形で本に目と手を触れさせる読書環境を整えた。これまで図書館での授業は体育理論、選択英語多読、選択生物、国語表現、美術、倫理、家庭科、進路などだった。今年度は各教科が意識的に図書館を使用し、資料を活用した。その中でも特筆すべき連携の事例を以下に紹介する。

ア 授業：基礎からの数学（選択2年と選択3年）

この授業は小中の復習を交えた内容で2時間続きの授業である。後期の授業を中心に授業の開始15分にグループ発表を取り入れた。事前に図書館で“数学に関する話題”の調べ学習を実施した。生徒が自ら設定したテーマは「0について」「インド式計算」「ピタゴラスの定理」など24項目だった。

イ 授業：英語多読（2、3年合同選択）

昨年度、英語Ⅱで英語の多読を試験的に取り入れた。今年度は学校設定科目、選択「英語多読」となり毎週月曜日の5・6時間目に図書館で授業が行われた。この一連の動きの中で図書館もバックアップし、「英語の多読」環境は整いつつある。本校の貸出方法は「貸出冊数無制限、貸出期限2週間」なので、生徒の読みたい気持ちを削ぐことなく本を提供できた。多読用図書の内容はジャンルが豊富で生徒は英語の習得と同時に読書の楽しさも味わう。英語の多読には多読三原則（＝辞書を引かない、分からないところは飛ばす、つまらなくなったらやめる）があるが、これは生徒が楽しんで取組める要因の一つでもあると思われる。貸出における英語多読の効果は大きかった。（4※表を参照）

ウ 授業：国語表現（２、３年合同選択）

教科と学校図書館と区立図書館が連携した紙芝居を使った授業が行われた。担当教諭が教材として絵本コーナーにあった簡易版の紙芝居（厚紙のケースに入った家庭版紙芝居）を手にとったのを見て、「本校図書館は紙芝居の舞台を所蔵している。紙芝居の本体については区立図書館から団体貸出を受ける。」と学校司書が提案し、紙芝居を使った授業を展開した。この授業は担当教諭が４人いるのだが、“楽しいことをやっているクラスがあるらしい。自分たちもやりたい”と生徒間に口コミで広がり他の担当教諭の授業にも取り入れられた。教材としての紙芝居は授業を楽しくするだけでなく生徒の学習への興味・関心や意欲を引き出し音声言語による表現方法を学ぶことに効果的である。

エ 授業：音楽・ソルフェージュ（選択３年）

受講する生徒のほとんどは保育士志望である。図書館を使う授業を、ということで童声（女性）合唱組曲 詩：きむらゆういち『あらしのよるに』を取り上げた。図書館所蔵の絵本『あらしのよるに シリーズ全７巻』を音楽室に展示した。生徒たちは休み時間に絵本を読むなどして曲全体のイメージを深め、歌や表現に活かした。

オ カウンセラー室

毎週火曜日が開室日。カウンセリング室の雰囲気作りに絵本を活用した。朝、カウンセラーと司書が絵本コーナーにて３、４冊程度選書した。手続きは一日貸し出し。

上記のほか、次の講演会や勉強会を主催することで教科との連携を図った。

カ 講演会の開催：多読のすすめ

講師に国立大学法人電気通信大学の酒井邦秀先生を招き、英語多読（２、３年合同選択）とライティング（２年選択）を受講する生徒対象に実施した。また放課後の図書館で行われた英語による読み聞かせは熱演で参加者の多読への興味・関心を引き出した。

キ 勉強会の開催：読書へのアニメーション

講師にＮＰＯ日本アニメーション協会理事長の黒木秀子氏を招き、国語科と読書に関心がある教諭対象に、子供を読み手に育てるスペイン発の読書教育法アニメーションの勉強会を開催した。

(2) 教室に出向く巡回ブックトーク

ねらい：来館を待つのではなく、図書館から出向いて本の面白さを伝える。

対象は１年次生。年間３回、毎回同一テーマを全クラスに実施する。時間は学年団の協力で授業時間内にブックトークの所要時間２５分（事後アンケート含む）を設定した。スケッチブックのフリップを使用して飽きさせない、かつ短時間に伝える工夫をした。

ア １回目６月実施 テーマ『生命の尊重』～私たちはかけがえない存在～

紹介した本『母と子でみるアウシュビッツ』早乙女勝元編 草の根出版会、『夜と霧』V.E フランクル著 みすず書房、『きよしこ』重松清著 新潮社、『いのちのまつり』草場一壽著 サンマーク出版、『宇宙のかけら』竹内薫著 講談社、『生命（いのち）の暗

号』村上和雄著 サンマーク出版、『図解雑学クローン』ナツメ社

イ 2回目 10月実施テーマ『嫌いな人とのつきあいかた』～アサーティブな関係を築こう～

紹介した本『もらったものはもらったもの』ステファニー・ブレイク著 PHP出版、
『復讐プランナー』あさのあつこ著 河出書房新社、『嫌いな人とのつきあいかた』伊賀
順子著 ポプラ社、『ちがいを豊かさに』岩川直樹著 大月書店、『言いたいことがきち
んと伝わる 50 のレッスン』平木典子著 大和出版、『高校生のための論理的思考トレー
ニング』横山雅彦著 筑摩書房

ウ 3回目 3月実施 テーマ『学ぶということ』

紹介した本『天動説の絵本』安野光雅著 福音館書店、『だから、あなたも生きぬいて』
大平光代著 講談社、『川島隆太の脳は朝ごはんでは決まる！』ヴィレッジブックス、『脳
をやる気にさせるたった1つの習慣』茂木健一郎著 ビジネス社、『本気になれば全てが
変わる』松岡修造著 文藝春秋社

(3) 図書委員会の活性化

ねらい：各クラスの図書委員を活発に活動させることによって教室に図書館の活性化を
伝播し、普段来館しない生徒にも“何かやっている図書館”をアピールする。

ア カウンター当番定着作戦

前期中、毎日カウンター当番に各委員の仕事内容を記入した呼出し状を出した。この呼
出し状は担任が朝のSHRで生徒に手渡すので結果的に担任にもクラスの図書委員の活
動の様子が伝わる。

イ 班活動の充実

班を新設し各図書委員の活動の場を増やした。他校図書委員会との交流会、都立中央図
書館探検ツアーを実施。読書週間企画の取組として、標語コンクールの実施、先生の好き
な言葉の原稿依頼と回収、冊子：図書委員のおすすめの作成、貸出統計グラフ作成・掲示、
言葉は力の特別コーナー設置、展示物作成、昼休みの校内放送などの活動をした。

ウ 区立図書館と連携した読書活動

今年度、区立図書館に新規事業として依頼した活動は、生徒が区立図書館司書からおは
なし会のレクチャーを受け、おはなし会に出演する、というものだ。参加した図書委員や
有志の生徒たちは、読み聞かせや紙芝居の読み方やおはなし会の演出の仕方を学び、後日、
区立図書館のおはなし会にゲスト出演した。生徒たちは読書ボランティアや区立図書館司
書に混じっておはなし会を勤めた。

4 成果と課題

利用者が固定化しており図書館を利用しない生徒が圧倒的に多い、という課題について取組
をしてきた。貸出利用者の比率（利用者/在籍数）は以下ようになった。

※今年度のデータは2010年12月現在

(1) 上級学年は昨年度より貸出利用者が増加している。

3年次生：昨年度（107/236）45%→今年度（113/235）48%

2年次生：昨年度（69/240）29%→今年度（78/233）33%

(2) 1年次生は上級学年の1年次と比較すると値が高い。

例年、学年進行に伴って利用は増す傾向にあるので底上げができたといえる。

3年次生の1年次：（58/237）24%

2年次生の1年次：（69/240）29%

現1年次生：（73/240）30%

(3) 平成21年度との比較（利用者/在籍数）

平成22年度のデータが2010年12月現在であることを加味すれば、若干ではあるが利用者の開拓はできたと思われる。

平成21年度：（287/709）40%

平成22年度：（267/708）37%

また、貸出利用状況（※表参照）の貸出延べ人数が伸びたことから新規利用者を開拓したことが予想できる。分類別の表においては今年度、言語と文学が他の分野の冊数を奪う形で著しく伸びているが、読書推進の取組の成果といえるのではないか。

◆◆ 貸出延べ人数 ◆◆

2011.1.31 現在

	貸出延べ人数	内訳			
		1年次生	2年次生	3年次生	教職員
平成20年度	1322	327	311	401	283
平成21年度	1525	233	609	341	342
平成22年度	1739	376	385	631	347

◆◆ 貸出総冊数と分野別冊数の推移 ◆◆

2011.1.31 現在

	貸出冊数	内訳									
		総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学
平成20年度	2,223	37	81	63	196	115	62	16	258	139	1202
平成21年度	3,013	50	108	48	223	194	83	33	319	607	1293
平成22年度	4,219	27	97	53	154	179	52	17	288	1707	1607

英語多読試行期間（平成21年度）・英語多読導入（平成22年度）

課題： 多少の利用者の新規開拓はできたがまだ全校生徒の60%（予想）は図書館の貸出を利用していない。引き続き取組が必要である。

5 実践の考察と改善策

本の面白さを伝えることは様々な取組のなかで果たせた。その取組の様子は図書館の活気につながった。そして読書の習慣がない生徒への動機付けになった。しかし、実践を通して再認識したことは、本を読まない生徒が本を読むのは必要に迫られたとき（主に授業）が顕著である、ということである。英検対策用に多読の本を借りる生徒には迫力があつた。授業で図書・資料を活用することは生徒がより質の高い本に触れる機会と時間を提供することになる。読書が苦手で読書習慣がない生徒にとっては、否が応でも授業で本を利用しているうちにやがて本と出会い本の魅力に気付くときが訪れ、読書をするようになるのではと考える。したがって学習面への支援を強化することが読書推進に必要なだと考える。

継続するための改善点としては司書教諭、図書を担当する係り教諭、学校司書が更なる連携を図り教科と協働し図書館を活用した授業の展開を支援することだと考える。

6 実践から見えてくる、実践のための効果的なポイント

学校として、読書推進のための組織をつくることの効果は大きかった。組織的に活動することで取組が全校的なものになった。取組についての協議において教科と図書館の双方から提案や意見が出され、実施内容や時期などが効果的・効率的に設定できた。また実施の際には構成メンバーから各該当部署や学年への連絡がなされることによってスムーズに遂行し、協力体制が出来上がった。委員会は授業や公務の合間を縫っての開催になるため無理のない形式をとることにした。委員会の開催は日程調整のうえ全員参加を目指す、必ずしも全員参加を是とせず参加できなかったメンバーには後日資料の配布とともに会議の内容を伝えるなどして臨機応変に対応した。

◆◆ 年間指導計画 ◆◆

	全校生徒対象	1 年次生対象
4 月	読書意識調査 1 回目 4・5 月のテーマ展示設置<原作本> 広報誌発行	区立図書館とのコラボした、新入生オリエンテーション (区立図書館との連携 1 回目)
5 月	新着案内と図書館だより発行 カウンター当番教育月間	I B C (合宿) での読書推進の取組。参加者全員本持参
6 月	教科との連携 新着案内と図書館だより発行 6・7 月のテーマ展示設置 ＜楽しい本・泣ける本＞	教室に出向く巡回ブックトーク・1 回目 学級文庫設置 (持ち寄り文庫)
7 月	図書館利用調査 新着案内と図書館だより発行	読書のすすめ講演会
8 月	長期休業中の開館	
9 月	教科との連携 新着案内と図書館だより発行 9・10 月のテーマ展示設置<ファンタジー>	(文化祭)
10 月	教科との連携 新着案内と図書館だより発行 読書週間企画準備と実施	教室に出向く巡回ブックトーク・2 回目
11 月	読書週間企画実施 区立図書館との連携 2 回目 新着案内と図書館だより発行 11・12 月のテーマ展示設置 ＜ベストセラー＞	(読書週間企画)
12 月	読書週間企画：3 年次生対象の講演会 新着案内と図書館だより発行	
1 月	読書意識調査 2 回目 新着案内と図書館だより発行 1・2 月のテーマ展示設置 ＜ファッションとメイク＞	
2 月	2 月の読書活動 (区立図書館との連携 3 回目)、新着案内と図書館だより発行	
3 月	2 年次生対象：読書のすすめ講演会 新着案内と図書館だより発行	教室に出向く巡回ブックトーク・3 回目

第6 都立図書館の連携事業

児童、生徒が主体的、意欲的に学習活動や読書活動に取り組むことは、今後の学校教育において益々求められます。そのため、子供たちの自主的な読書を支えるための様々な資料を有し、子供と読書を結びつけるためのノウハウを持っている公共図書館と学校が連携をしていくことは、更に重要になってくると思われます。

都立図書館は、平成 22 年度の子供読書活動推進モデル校事業において、各モデル校と連携して、児童・生徒の読書活動の支援などを行いました。これらの経験を活かし、今後も都内における本や読書活動に関わる専門機関として、都内の学校に対して様々な支援を行っていきます。また、調査研究図書館として、あらゆる専門書、データベースを豊富に揃えておりますので、調べ学習、教材研究等にも利用できます。

1 都立中央図書館の連携メニュー

- (1)「高校生のための情報活用講座」(高校対象) . . . p.73
- (2)「検索セミナー」(高校対象) . . . p.73
- (3)「図書館見学ツアー」(高校対象) . . . p.74

2 都立多摩図書館の連携メニュー

- (1) セミナールームを使用した連携メニュー . . . p.75
 - ア 図書館職員のブックトークや読み聞かせ
 - イ 絵本の読み聞かせのガイダンス
 - ウ 夏休み自由研究講座(小学校対象)
 - エ 調べ学習や教科学習支援
- (2)「図書館のひみつ探検隊！」(小学校対象) . . . p.77
- (3)「バックヤードツアー」(中学校・高校対象) . . . p.78
- (4)「検索セミナー」(中学校・高校対象) . . . p.78
- (5)「16ミリフィルムで観る「江戸・東京」」(高校対象) . . . p.78
- (6)児童書のセット貸出(小学校・中学校・高校対象) . . . p.78
- (7)学校図書館の選書支援(小学校・中学校・高校対象) . . . p.78
 - ア 子供の発達段階に応じた本の紹介
 - イ 新刊書の閲覧
- (8)「学校支援グッズ」の提供(小学校) . . . p.79

東京都立中央図書館 約 180 万冊もの貴重かつ豊富な蔵書を取り揃えています。また、CD-ROM やオンラインデータベース情報も活用し、利用者の多様な調査研究活動を支援しています。 担当：企画経営課・情報サービス課 〒106-8575 港区南麻布 5-7-13 TEL 03-3442-8451 (代表) ・ FAX 03-3442-8919	東京都立多摩図書館 児童青少年(0歳～18歳)を対象としたサービスと雑誌サービス(東京マガジンバンク)を行ってま す。学校関係者、保護者など子供の読書に関わる皆様に役立つ資料も取り揃えております。 担当：児童青少年資料係 〒190-8543 立川市錦町 6-3-1 TEL 042-524-6428 (直通) ・ FAX 042-525-9168
---	--

1 都立中央図書館の連携メニュー

セミナールームでの講義と、図書館内での演習を組合せた形式で行います。講義は、一般的な資料の特性と探し方、文献リストの書き方、簡単なレポートのまとめ方、都立中央図書館での実際の調査方法について話します。演習では、あるテーマ（学校又は図書館が用意したもの）に基づいた資料を探して、文献リストを作ります。講義と館内見学で約 2 時間、演習と検索講習で約 2 時間の合計 4 時間です。

(1)「高校生のための情報活用講座」(高校対象)

モデル事業： 都立鷺宮高等学校との連携事業

講座「表現法研究」の一環としての「高校生のための情報活用講座」

総合学習における小論文・レポート作成講座である「表現法研究」で、卒業レポートに使用した参考文献リスト作成の技術を学ぶため、情報検索の手法や文献リストのまとめ方を学ぶ講習会を実施してほしい、との依頼がありました。そこで、3 年生 25 人を対象に「情報活用講座」を実施しました。

◇日時 平成 22 年 8 月 27 日（金）10:00～12:00・13:00～15:00

◇プログラム

- ・午前：3 グループに分かれて、検索講習と館内見学
- ・午後：①情報検索についての講義（35 分）
テキスト「高校生のための情報活用講座」(配布資料＋パワーポイント)を使用
- ②文献リスト作成演習（60 分）
講習と講義に基づき、各自卒業レポートのテーマの文献を開架から 2 冊、検索で閉架から 3 冊探し、文献リストにまとめる演習

◇生徒たちの感想（一部）

- ・自分でもネットで調べていたが、今日教えてもらった検索でテーマをしぼることができた。
- ・今まで学校や近くの図書館で調べて本があまり見つからなかったが、今日いい本が見つかった。
- ・調べたいテーマに関する本を見ているうちに、近くの棚に置いてある本からも参考になるものを見つけた。実際に本を手にとって調べるのも大事だと思った。

(2)「検索セミナー」(高校対象)

都立図書館で提供している各種検索ツールについて、使い方を初歩から解説します。簡単な検索から、項目を指定するような高度な内容まで幅広く対応可能です。

- ・都立図書館蔵書検索…都立図書館の蔵書を検索するための OPAC について
※OPAC…利用者用蔵書検索システム
- ・マルチ検索…都内公立図書館横断検索や国会図書館雑誌記事索引など、都立図書館以外の資料も探せる Web 上の蔵書検索ツールについて
- ・オンラインデータベース…百科事典、国語辞典、歴史事典等がまとめて検索できる「ジャパンナレッジ」や、朝日新聞の記事が探せる「聞

蔵Ⅱビジュアル」など、都立図書館で使えるものについて

(3)「図書館見学ツアー」(高校対象)

普通の利用ではなかなか見られない、都立図書館の様々な「舞台裏」をお見せします。

・通常ツアー (1～2 時間)

・・・開架の閲覧室から地下書庫まで図書館の様々な機能を知ることができます。

視覚障害者のための先端サービス、資料を大量保存するための電動集密書庫、資料を長期保存するための修復部門である資料保全室、江戸時代の貴重な資料が豊富にある特別文庫室など、ふだん見られない図書館を広く知ることができます。

・テーマ別ツアー (1～2 時間)

・・・特定のテーマを設定し、そのテーマに関するあらゆる資料や図書館サービスについて様々な角度から見学をします。

【テーマ例】

「新聞」⇒・新聞閲覧コーナーの見学 (全国の地方紙、専門紙、洋新聞と縮刷版)

・地下書庫の見学 (洋新聞の原紙、マイクロフィルム)

・マイクロフィルムをリーダーで読んでみる

・新聞記事データベースの検索 ……など

「美術」⇒・美術情報コーナーの大型美術書、美術関係参考図書を閲覧

・マルチ検索パソコンで美術情報の検索

・絵巻物 (複製) を実際に広げて読んでみる ……など

モデル事業： 都立石神井高等学校との連携事業

新聞の様々な形態と利用方法を知る見学ツアー

石神井高校では、一年間、新聞を教材にして学んできたので、そのまとめとして、開催中の企画展「新聞っておもしろい！」を中心とした見学ツアーの依頼がありました。

◇日時 平成 22 年 1 月 15 日 (土) 14:30～16:30

◇プログラム

- ・「新聞っておもしろい！」を担当した職員によるギャラリー・トーク (20 分)
- ・DVD「新聞の届くまで」上映及び企画展の自由見学 (20 分)
- ・都立中央図書館の新聞閲覧コーナーの見学(5 分)
- ・新聞関係のデータベースの検索講習 (15 分)
- ・新聞原紙、マイクロフィルムを収蔵する地下書庫など見学(25 分)

★ 上記の複数を組合せたプログラム (ツアー+検索セミナーなど) も実施できます。
中央図書館のサービスや職員の仕事についても紹介することができます。

都立中央図書館は、180 万冊の蔵書数を誇る調査研究図書館です。

国内でも最大級の豊富な蔵書を用いた調べ学習ができます。そのほかにも、公立図書館では珍しい資料保全の仕事や視覚障害者サービスなど、見どころがたくさんあります。
ツアーやセミナーの内容、組合せについては、ご要望に応じて柔軟に対応いたします。

2 都立多摩図書館の連携メニュー

(1) セミナールームを使用した連携メニュー

都立多摩図書館では、平成 23 年度に「セミナールーム」を開設しました。この部屋は、学校が読書活動や調べ学習等の学習に利用することができます(1 回につき 30 名程度の受入れができます)。「セミナールーム」では、1F の児童エリア、青少年エリアに配置している資料も合わせて活用できます。

===== 【セミナールームを使用した連携メニュー一覧】 =====

- ア 図書館職員が児童・生徒にブックトークや読み聞かせを行います。
- イ 絵本の読み聞かせのガイダンスを行います。
- ウ 小学生を対象に、夏休み自由研究講座を開催します。
- エ 調べ学習や教科学習を支援します。



ア「東京都子供読書活動推進資料」を活用して、図書館職員が児童・生徒にブックトークや読み聞かせを行います。

ー「ブックトーク」とはー

子供たちに直接語りかけて、本の紹介をするのがブックトークです。
どのような本を読んだらいいかわからない、読むのがちょっと苦手、という子供たちが本を手にとるとききっかけづくりに効果的な手法です。

ー「東京都子供読書活動推進資料」とはー

都立多摩図書館が作成したおすすめブックリストです。

【小学生向け】

『ほん・本・ごほん』（全 3 冊）

「ともだち」「いぬ」「へんしん」など、楽しいテーマごとに様々な本を紹介。3 冊合わせて 72 テーマあります。都内小学校に配布済み。

【中学生向け】

『扉をあけて 中学生のあなたにおくる 56 冊の本』

「素敵な仲間」、「ステージ」、「秘密」など 7 つのテーマで 56 冊の物語を紹介しています。

【高校生向け】

『羅針盤 高校生のためのノンフィクション 49 冊』

「挑む!」、「世界は驚きに満ちている」など 7 つのテーマで 49 冊のノンフィクションを紹介しています。



モデル事業：町田市立町田第二中学校との連携事業

「図書委員生徒へのブックトーク」

図書委員会が他の生徒に対しブックトークを行うことになり、図書館職員の実演を示してもらいたい、との依頼がありました。「扉をあけて」の中の“秘密”をテーマにした項目の掲載資料を中心に、絵本、ノンフィクションも加えて行いました。参加した生徒全員に「扉をあけて」を配布しました。

◇日時 平成 23 年 1 月 20 日（木） 15:45～16:30

◇紹介した図書（35 分のブックトーク）

- ・『楽園のつくりかた』 笹生陽子著（講談社）
- ・『宝島』 スティーブンスン作（岩波書店）
- ・『みるなのくら』 小澤俊夫再話 赤羽末吉画（福音館書店）
- ・『白狐魔記 源平の風』 斉藤洋著（偕成社）
- ・『小さな飛行名人（栗林慧ひみつの瞬間写真館 昆虫 1）』 栗林慧写真（金の星社）
- ・『グリーン・ノウのお客さま』 ルーシー・M・ボストン著（評論社）

◇生徒たちの感想（一部）

- ・今回のブックトークを参考にしながら、「秘密」が気になるように、話に強弱をつけながら上手にブックトークができたらいいなと思いました。
- ・自分がこんなふうになれるか不安になったけど、はやくやりたいなという気持ちも沸いてきました。今回初めてブックトークというものを聞いて、とてもすごいなと思いました。
- ・『楽園のつくりかた』と『宝島』のつなげ方はとてもすごいと思いました。みんなの目を見て、まるで会話のように言っており、すごいと思いました。

イ 絵本の読み聞かせのガイダンスを行います。

中学生、高校生は、奉仕活動や職場体験等で小さな子供への読み聞かせを体験する機会もあるかもしれません。図書館職員が、中高生に、絵本の読み聞かせのノウハウや絵本の楽しみ方を話します。

モデル事業：都立東久留米総合高等学校との連携事業

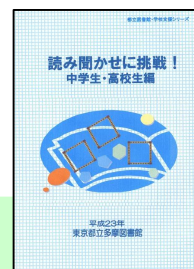
「科目『奉仕』における『絵本の読み聞かせについての講演』」

奉仕活動で保育所等での絵本の読み聞かせを行う生徒がいるため、読み聞かせのノウハウについての講義の依頼を受け、1 年生全員に対して実施しました。

◇日時 平成 22 年 6 月 24 日（木） 14:15～15:15

◇プログラム

- ・「読み聞かせに挑戦！」を全生徒に配布
- ・絵本の楽しさについての講義
- ・読み聞かせのノウハウについての講義
- ・読み聞かせの実演
(図書館職員と教員で 3 グループに分けて実施)



◇生徒が記入したワークシート（一部）

- ・絵があることで想像の範囲が決まってしまうそうですが、想像しやすいほうが物語に入りやすいとも言えます。子供達にとって絵本は夢のあるものだと考えました。
- ・手で本をしっかり支え、見ている人に本をしっかり向け、ゆっくり心をこめて読めば、小さな子にも伝わるんだなと思いました。講演者の読み方は、どんな年代にでも通じる、素晴らしい読み方で参考になりました。
- ・将来保育士になったら、子供達にたくさんの本を読まないといけないので、少しずつでも練習していきたいな、と感じました。自分でやってみて「あっ、この読み方ならいける」と思ったとき、まわりの人で試してみたいと思いました。

ウ 夏休み自由研究講座を開催します。－小学校対象－

夏休み前（6月、7月）に、小学生を対象に夏休み自由研究講座を開催します。図書館職員が、図書を活用した自由研究への取組方法を紹介します。興味を持ったテーマからお気に入りの一冊を見つけることもできるかもしれません。



エ 調べ学習や教科学習を支援します。

都立多摩図書館の資料を利用して、セミナールームで、調べ学習等の学習活動を行うことができます。特定のテーマについての相談もお受けします。

(2) 図書館のひみつ探検隊！（小学校対象）

・ いろいろな資料探検隊 コース

大きい本、小さい本、しかけ絵本、古い本、都立図書館ならではのいろいろな本を書庫をめぐって探検します。

・ バリアフリー探検隊 コース

対面音読室、音声読み上げソフト、点字図書など視覚障害の方へのサービスを探して事務室や閲覧室を探検します。

・ いろいろな道具探検隊 コース

本を修理するための道具、本を配送するための道具など特別な道具を見たり、使ってみたりします。



点訳ソフトを使って目の不自由な人へ、点字で情報提供。



コンテナを使って区市町村立図書館へたくさんの本を貸し出します。

過去の図書館探検隊の様子

(3) バックヤードツアー (中学校・高校対象)

都立多摩図書館の特色あるコレクションを紹介します。

- ・地下2階の明治時代の貴重な児童書、雑誌創刊号コレクション
- ・1万6,000タイトルの「東京マガジンバンク」コレクション



図書館職員が貴重な資料の説明をしながら館内を案内します。

(4) 検索セミナー (中学校・高校対象)

図書館職員による、データベースの使い方、図書館蔵書検索などの検索セミナーです。

1回につき10名程度のグループで行います。

- ・「雑誌記事を調べるには？」

(自宅や学校でもインターネットを通して使えるデータベースを中心に、雑誌の記事を調べる方法を紹介します)

- ・「都立図書館はどんな資料を持ってるか？」

(都立図書館蔵書検索システムの利用方法を説明します)

- ・「聞蔵Ⅱ、ヨミダスで調べてみよう！」

(新聞記事データベースの検索方法を紹介します)

(5) 「16ミリフィルムで観る「江戸・東京」」 (高校対象)

都立多摩図書館所蔵の16ミリフィルムの中から「江戸・東京」をとりあげたフィルムを上映します。

ツアーや検索セミナーの内容、組合せについては、柔軟に対応しますので、ご相談ください。都立多摩図書館のサービスや職員の仕事についても紹介することができます。

(6) 児童書のセット貸出 (小学校・中学校・高校対象)

「東京都子供読書活動推進資料」掲載図書を都内の学校へ貸し出します。読書活動にご活用ください。配送に係る料金は借受け側の負担となります。

(7) 学校図書館の選書支援 (小学校・中学校・高校対象)

都立多摩図書館は、約160,000冊の児童資料、約16,000冊の青少年資料を所蔵しています。豊富な蔵書をもとに、学校図書館を支援します。

ア 子供の発達段階に応じた本の紹介等を行います。

フィクションやノンフィクション選定の参考のため、当館で編集した「ほん・本・ごほん」
「扉を開けて」「羅針盤」掲載図書の選定についてお話します。

イ 新刊書をまとめてご覧になれます。

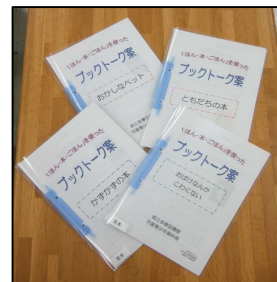
都立多摩図書館で最近購入した児童書の新刊書を見ることができます。

(8) 学校支援グッズの提供（小学校）

冊子を有効に活用できます。

学校支援グッズ

- ・ブックトーク用シナリオ
- ・ほん・本・ごほんクイズ
- ・展示用装飾グッズ「切り絵」（貸出となります）
- ・展示用パネル（貸出となります）
- ・えほんかるた



教職員の見学を受け付けています。

選書や学校図書館レイアウトなどの参考に、図書館職員が、都立多摩図書館セミナールームや1階の青少年エリアと児童エリアをご案内します。子供と本をつなぐための、ブックトークや読み聞かせ等の効果的な方法についても相談にのります。

事前にお問合せください。

モデル事業：昭島市立共成小学校との連携事業

「教職員研修」

教職員が読書指導力を高めるための研修をお願いしたいとの依頼があり、図書館職員が講義、実演を行いました。

◇日時 平成22年4月30日（金）13:45～15:45

平成22年5月26日（水）13:45～15:45

◇プログラム（2日間にわたり、以下の内容を講義、実演）

- ① 「ほん・本・ごほん」を事例とした子供への本の紹介方法
- ② ブックトーク
 - ・ブックトークの概要
 - ・ブックトークの実演（2テーマ）
- ③ 読み聞かせ
 - ・読み聞かせ（絵本、物語、ノンフィクション）の概要
 - ・絵本の読み聞かせのノウハウと実演
- ④ 都立図書館「学校支援サービスのページ」、「学校支援グッズ」の紹介
校長先生をはじめ教師の方々と懇談。本を読まない児童へ読書を薦めるにはどうしたらよいかとの質問、ノンフィクションの本を活用してみたいとの感想等をいただいた。

== 都立図書館ホームページ上での情報提供を行っています ==

「学校支援サービス」のページでは、読書活動に役立つ情報を提供しています。このテキストに掲載した情報も随時更新していますので、ぜひご覧ください。

「学校支援サービス」のページ : <http://www.library.metro.tokyo.jp/j/top.html>

おわりに

本テキストは、東京都教育委員会が平成 21 年度から取組んでいる「第二次東京都子供読書活動推進計画」に基づく子供読書活動推進モデル校事業の取組についてまとめたものです。小中学校では、未読の子供たちが進んで本を読むようになるための読書指南の役割に関する研究を、高等学校では、生徒の読書状況に応じた読書活動の推進に関する研究を行いました。

読書指南役とは、「担任と連携し、個別の読書指導を行う。子供が親しみや信頼感を持ち、この人がすすめる本なら読んでみよう、と思えるような存在の大人」（第二次東京都子供読書活動推進計画より）です。モデル校の実践事例を見ると、子供の読書活動の推進においては読書指南の役割を担う大人の存在が大変重要であることが分かります。

小中学校においては、学校司書、司書教諭、図書館整備ボランティア等が読書指南役となって環境整備に当たり、読書活動の推進に大きな役割を担っています。また、図書委員会の児童・生徒、保護者も指南役となることで、温かい触れ合いのきっかけづくりができたという事例も数多くありました。

高等学校においては、進路部との連携で受験生のための大学受験資料コーナーの設置をし資料提供に力を入れた事例、都立図書館等とも連携を図り情報検索の手法や文献リストの作成法を学ばせたり、近年顕著になっている生徒の新聞離れに対応する等、学習情報センターとしての機能の強化に向けた取組をした事例もありました。

また、特に学校司書においては、学校図書館の整備、資料の準備及び授業への参加等を通して各教科等の学習にも深く関わり、児童・生徒の言語活動の更なる充実に資する大きな役割を果たすことができたことも紹介されています。

このように、読書指南役は特定の大人ではなく、読書活動に関わる全ての人がその役割を担うことが可能なものです。本テキストを参考にしながら、各学校に応じた読書活動の取組を推進していただくことを期待しています。

最後になりましたが、モデル校及び都立図書館におかれましては、僅か一年間という短い期間ではありましたが、子供読書活動推進モデル校事業にご尽力いただき、ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

本テキスト作成協力者

小学校（3校）

モデル校	校長名	連絡先
杉並区立東田小学校	鈴木 友美（22年度・23年度）	03-3313-1464
江戸川区立第六葛西小学校	伊藤 辰久（22年度・23年度）	03-3688-0485
昭島市立共成小学校	真如 むつ子(22年度)・香積 信明(23年度)	042-545-0383

中学校（2校）

モデル校	校長名	連絡先
武蔵村山市立第五中学校	白戸 一範（22年度・23年度）	042-560-3155
町田市立町田第二中学校	上原 直樹(22年度)・富田 直人(23年度)	042-722-1101

高等学校（5校）

モデル校	校長名	連絡先
都立美原高等学校	五石 秀治(22年度)・川原 博義(23年度)	03-3764-3883
都立広尾高等学校	渡辺 洋(22年度)・田神 仁(23年度)	03-3400-1761
都立石神井高等学校	小池 幸彦(22年度)・竹内 秀一(23年度)	03-3929-0831
都立鷺宮高等学校	関 毅彦(22年度)・石井 茂光(23年度)	03-3330-0101
都立東久留米総合高等学校	青木 伸道（22年度・23年度）	042-471-2510

都立図書館

図書館	館長名	連絡先
都立中央図書館	森口 純	03-3442-8451
都立多摩図書館	小澤 智恵	042-524-7186

子供の読書活動を推進する読書指南役の働きかけ

平成23年8月発行

編集・発行	東京都教育庁地域教育支援部管理課
所在地	〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号	03-5320-6858
ファクシミリ	03-5388-1734